

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter

2004.9
No.5

CONTENTS

表紙写真説明



「茶摘みの人々」

「富士山、日本の聖なる山」

共に、G. Waldo Browne *JAPAN. The Place and the People* (Boston: Dana Estes & Company, 1904)

開国以後多くの欧米人が日本を訪れた。そして旅行記や見聞記を残した。明治時代になると、日本についての案内書が出されるようになった。それらは文字だけでは説明できない日本の姿を多くの写真やスケッチ画を挿入することで読者にそのエキゾチックな様相を示そうとした。ここに紹介する写真2枚は、そのような日本を紹介するG. Waldo Browneの*JAPAN. The Place and the People* (1904)に掲載されたもので、恐らく著者が日本で買い求めて持ち帰った写真であろう。

日本の古典的なイメージと言えば富士山・芸者であるが、そのイメージ形成にはこの種の写真が大きく影響している。左の写真には「Fujiyama, the Sacred Mountain of Japan」(富士山、日本の聖なる山)というキャプションが付けられている。手前の情景はもちろん自然のものではない。撮影のために演じられた人々の姿である。しかし、そこにも明治時代の人々の生活をうかがうことができる。

この種の本は芸者その他の多くの女性が写真に撮られて収録されている。この本にも多くの女性の姿が登場する。そのなかで珍しく実態に近いと思われる写真が右の一枚である。これは「Tea Pickers」(茶摘みの人々)というタイトルが付けられている。どこかの茶畑で働く茶摘みの女性たちや子供たちを集めて撮った集合写真であろう。赤ん坊を背中におんぶしている女子が何人も写っている。生活の匂いがする貴重な写真であるが、惜しむらくは撮影地や撮影年などのバックデータがない。

なお、当時は未だカラー写真は無い。これらは焼き付けられた白黒写真に後から着彩したものであろう。したがって、実際の色が写真の通りだったとは言えない。(福田 アジオ)

巻頭言 3
山口 徹 (神奈川大学名誉教授)

対談 4

歴史的事実とは何か
文字資料と非文字資料のあいだ
宮地 正人 × 中村 政則

研究エッセイ ESSAY

朝鮮時代の図像資料と風俗画
女性をめぐる眼差し 10
金 貞我

長くなった日本人の脚? 12
芦澤 玖美

近代天皇のイメージ形成
視覚情報分析の可能性について 14
増野 恵子

上海史研究と『良友』画報について 16
孫 安石

モバイルエージェント間通信のトラフィック 18
能登 正人

海外博物館事情 Foreign Museums

韓国における大学博物館の現況と役割 20
金 花子

2003年度
外部評価と対応策 22

コラム・自著を語る... 26
『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』
富澤 達三

受贈資料一覧 27

主な研究活動 28

2004年度研究担当者紹介 30

彙報 31

Report & Information 32

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学名誉教授

山口 徹

1970年代後半に吹き荒れた大学紛争との関わりの中で、研究と教育の融合を基本理念とし、外に開かれた大学の構築を目指す、一つの核として財団法人日本常民文化研究所を招致し、その再建を志した者の一人として、神奈川大学日本常民文化研究所(神奈川常民)の研究と教育の拡充を目指して創設された歴史民俗資料学研究科が、COEプログラムの“拠点”として「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマに、新たな研究を開始したことは喜ばしい限りである。

この研究科は「設置の趣旨」でも述べられているように「国際化がしきりに強調され、日本人が人類社会の中でいかなる役割を果し得るか、また果すべきかが問われている現在、我々日本人自身が誤りない自己認識を持つことは、特に緊急な課題となっている」との認識のもとに、真に学問的な研究の裏付けを持ち、広い総合的な視野に立った正確な歴史像を造ることを目的としている。そのための手段として「諸学を総合した資料学」の確立が必要であり、その研究と人材を育てる場として本研究科は創設されたものであった。したがって、本研究科創設の背景には渋沢敬三と日本常民文化研究所が持つ、我が国にはまれな独立の、しかも常に社会に向かって開かれた研究所としての伝統を現時点に立って批判的に継承する姿勢があった。

私たちは神奈川常民設立当初から文献に偏りがちだった歴史学の実状に対する反省を通して、考古学・民俗学・民具学をはじめ、自然科学の諸分野までも含む諸学の協力関係を深めるために、文献・民俗・民具・考古・絵画・建築等、日本列島における人間社会の歩みの中で残されてきた各分野の資料そのものについての綿密な学問研究を深め、諸学の協力の前提を確固たるものとする必要があると考えてきた。当面は旧日本常民文化研究所から蓄積されてきた文献史料学・民俗民具資料学を中心に「諸学を総合した資料学」の実現を目指してきたのである。したがって、歴史や民俗の創造の主体であり客体である人間社会の残してきた資料を文字・非文字資料を問わず、日本列島の人間社会の残した歴史や民俗を今日に伝える情報として利用する道を求めようとしてきたのである。そこではさし当たって、非文字資料を民俗民具資料に限定し、文字・文献資料との総合を果たすことを当面の課題としてきた。

このさし当たっての課題の限定が、今回のCOEプロジェクトの中で批判的にどのように継承され、発展させられてゆくか、神奈川常民及び本研究科創設に関わったものの一人として見守り、このプロジェクトに参加する諸学の立場を乗り越えた研究の積み重ねの中で豊かな成果が結実されることを期待したい。



対

談

宮地 正人

国立歴史民俗博物館・館長

×

中村 政則

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授

歴史的事実とは何か 文字資料と非文字資料のあいだ

資料の情報論・情報空間論

中村 1970年代の半ば、あるいは80年代に入って歴史学は、戦後歴史学から現代歴史学へと転換しました。神奈川大学では90年代、網野善彦・丹羽邦男・山口徹さんたちの代に大学院に歴史民俗資料学研究科を作りました。「資料学」に新味がこめられたわけです。今日は宮地さんの、ペリーの白旗書簡という資料が偽文書であるという議論を糸口にして、いろいろお話をお聞きしたいと思います。

宮地 私は1973年に史料編纂所に入って、第一次史料の井伊家史料の活字化に従事しました。その前提の第一次史料によった戦前の成果である「大日本維新史料稿本」はデジタル化されて全部公開されています。そこにはあやふやな事実は一切入っていません。他方、周知のことを身内に伝える書簡という、第二次史料における情報の意味を考えてきました。情報がいつ出て、どう伝播し、どう定着するのかという情報空間がいかに構成されるかに関心を持ってきました。現在私がいう「風説留」史料は膨大に集積され史料編纂所の書庫などに収められ、公開されています。その関心の中で「風説留中画像史料一覧」を編纂しました。表題は画像史料となっていますが、意図としては、大規模な「風説留」がどこに、どういうものがあるのかという文書目録を作りたかったのです。江戸時代の後期に随筆が好事家によって書き留められるのはなぜかという問題にも連なります。

中村 随筆ですか？

宮地 これは、むしろ民俗学の方が一生懸命取り組んでいます。古鏡だとか、斧だとか、古墳から掘り出したものをみんなで持ち寄った品評会の記事などがあります。好事家のやり取り、あるいは集まって勉強したときのメモ、そのとき写した絵とかです。それが、ペリー来航ぐらゐから変わり、好事家の記録ではなく、「風説留」という非常にリアルな政治情報となってくる。ただし、何が本物か、何が偽物かは、民衆にはわかりません。権力にしかわからないものが漏れるというの、興味深いわけですが、彼らは真偽判定については、集める中で淘汰していくしか方法がありませんでした。ですから、「風説留」には正しいものもあれば、かなり省略されたり、間違って写されたものもあるし、完全な偽文書も入っています。偽文書だから意味がないということではなく、うわさ空間のなかで両方意味があるのです。むしろ、偽物の方が当時の民衆の気持ちをうまく表しているかも知れません。これは史学方法論としては情報空間論の大きなテーマです。

ペリーの白旗 正文書と偽文書

中村 宮地さんの論文「ペリーの白旗書簡は偽文書である」を読んだときに、ぼくもショックでした。日本が開港に应ぜず、戦争になれば米側が勝つに決まっているから、和を請いたければ、この白旗を掲げてこいという重要史料があります。宮地さんはこれを偽文書と見破った。

これほど高度な日本語を書ける人はペリー艦隊にはいないはずだ、ここから偽文書と見破ったのかなと思ったのですが？

宮地 嘉永6年8月から出始めるのですが、なぜ外交関係にだけ多くの偽文書が出るのか。幕府は、一切外交文書というのは公開しない。当然、日米和親条約の正文も公開していないのです。港を開いたとか、漂流民の扱いか、どういう内容の条約を結んだのかというお触書は出します。ただし、安政条約の場合には全文出すようになります。幕府が情報を公開するにつれ、偽文書が出なくなります。面白い対応関係です。当時3000万の日本人が、ペリー来航から国事問題、政治問題に焦点を合わせ始める。しかし情報は一切公開されない。それですから、幕府の弱腰の裏に何かあるはずだという、民衆の考えが裏返しにこの白旗書簡には出てくるわけです。うわさが流れたその直後にそのうわさそのものが文書になり始めるのです。

中村 交渉ごとですから、ペリーの幕府宛の公式文書にはなくても、やり取りの記録は残るのではないですか？

宮地 それは史料学の問題で、「対話書」という問答形式の記録がつくられます。後の記録には出ているのですが、不思議なことに、ペリーが来た6月4日から9日までの「対話書」は見つかっていないのです。

中村 明治の記録ですか？

宮地 幕末の少しあとで通辞がまとめた記録です。

中村 そういうやり取りが一部にはあったのでしょうか。中国はアヘン戦争で負けて、極端な不平等条約を押し付けられた（南京条約）これに対し、幕末開港を迫ったときのアメリカの対日政策は、砲艦外交なのかどうなのか、実際は、ペリーと日本との開港交渉では一発の砲声、大砲も撃っていない。いわば平和的な交渉だった。ペリー艦隊は功績を挙げたかったでしょうからね。

宮地 基本的には「砲艦外交」だと思います。一番大事なのは米国大統領の国書を受け取らせ、国書に対して返事をもろうことです。これがペリーの戦略でした。それ以前に浦賀に来たアメリカも含む外国船のやり方とは全く違うのです。幕府が要求しても退かない。武装した部隊を上陸させて国書を受け取らせる。返事をとる。日本人が肌で恐怖心を感じる中で、こんな手紙を蛇足で出すわけがない。

中村 ペリー艦隊は、脅しの空砲を撃ったり、祝砲を撃ったりはしている。しかし、日本が撃ってこない限り、

ペリーには砲撃の権限は与えられていなかった。

宮地 ですから、そこまでやるとはっきり言ったのはペリーなのです。それを6月4日に言う。そういう意味でも6月4日はクリティカルな日なのです。

中村 横浜開港資料館に白旗を掲げた図像が数枚あります。そのうちの1枚が、ペリー艦隊が連れてきたハイネの描いた絵でした。この絵を見ると明らかにアメリカが白旗を掲げています。他方、日本人の描いた絵というのは、全部アメリカ側が測量のために白旗を掲げているものです。大江志乃夫さんは、『日本書紀』には白旗は降伏ではなくて、戦闘停止で平和交渉という意味を表す記載があると述べています。「ダンス・ウィズ・ウルプス」という南北戦争の頃を舞台にしたアメリカ映画では、主人公が白旗を掲げてインディアンのところに交渉に行く。これは降伏という意味ではないのです。平和的に交渉しようという意味ですよ。降伏という解釈はやはり一面的だと思うのですが？

宮地 歴史家なら、オランダから相当な知識が入っているということを考慮します。白旗を掲げて彼らは測量をやっていると、白旗は武力行使ではないしるしというのは、もう周知でしたからね。

中村 当時の民衆にとってたった4艘の黒船でも、とにかくびっくりした、それは恐怖でもあった。

宮地 今まで幕府の言いつけを守っていたのが、ペリーは戦闘行為に入っても辞さずという態度をとった。にもかかわらず、幕府が動けないという、この事態に恐怖したのです。ですから、白旗書簡というのは現実の史料より面白いのです。私は単なる偽文書ではなくて、まさにそのうわさ空間が持っていた気持ちの結晶化だと思います。

中村 ペリーの白旗書簡の問題は、外圧に対する日本人の対応の原型を知る上で非常に面白い話だと思います。

文字資料と非文字資料

中村 文字資料と非文字資料の関係は順列組み合わせで言えば4通りあるわけです。文字資料は文字資料だけで読む、非文字資料は非文字資料だけで読む、あるいは双方で補完されなければいけない。文字資料と非文字資料は両輪であるという言い方もあります。いずれにしる、相互補完されながら歴史像を豊かにしていくということなのだろうと思うのです。



対談

宮地 アーカイブズ学を発展させれば良いという単純な考え方には研究者として賛成できません。私の勤務先が博物館ということもありますが、英米のアーキビストは国家の蓄積した情報をいかに見せるかが仕事です。われわれは研究者として、資料情報全体をどう把握するかという課題を課せられています。私の専門の幕末維新期で言うと、文字史料と有機的に結合させながら、錦絵、摺物、手書きの画像資料そして写真資料を組み合わせ、非文字資料学をどう作るかという課題にぶつかっています。具体的に言うと、ペリー来航のときには、錦絵はほとんど出ません。摺物は100枚限定とかというお目こぼしのかたちをとって出されている。錦絵は完全な分業システムであって、一人ではできないのです。資金的には絵草子屋が相当の資金を用意し、人間も100人単位で関わる。錦絵がなぜ江戸絵とか東絵と言われるかという、江戸でしか組織できないからです。

中村 横浜はどうですか。

宮地 横浜で出回るものは、ほとんど江戸でやっています。大阪は小規模ですが、京都は結局、錦絵が出ないで、銅版画が出る。安政の大地震のときは、町奉行所の監視の手がまわらず、鯨絵がどっと出ます。町奉行所が再機能した途端に出なくなる。ですから、情報錦絵として一番早く出るのは、私は横浜絵だと思います。幕府もお目こぼしをしますが、攘夷運動が起こる文久3年になるとぱたっと止んでしまう。性格上、錦絵に政治風刺がないのは当たり前なのです。風刺をやったら捕まって獄死ですからね。錦絵だけ研究しても、当時の人間が要求していた画像情報の全体はわからないのです。いくつかのカテ

ゴリーの画像資料の組み合わせの中で初めて全体が見えてきます。

中村 ペリーの人物画像がありますね。なにか怖い顔をしたものです。だんだんマイルドな顔になっていくように思うのですが、編年的にペリーがどう描かれてきたかという研究はあるのですか。

宮地 異人像ですね。嘉永7年に2度目に来たときはみんな実際の顔を見ているから怖くなくなる。ただし、色刷りのものは、あまり見たことはありません。私は摺物で、手彩色だと見えています。特に船は錦絵ではありません。安政五カ国条約のときは、摺物で出されます。情報論として画期的なのは、『太政官日誌』を明治元年2月に政府が出してしまうということです。見せることによって世論をキャナライズする方向に変わったというのは、江戸時代の方針からすると180度の転換だと思います。

画像 肖像画をめぐって

宮地 編纂所にいた時に、黒田日出男さんと、江戸期の画像情報で文字資料だと伝えられない情報とはどういう性格、種類のものがあるかということを議論しました。一つは人の肖像画です。肖像画というのは、芸術的評価より、似ているか似ていないかという「肖似性」が要求されます。2つ目は、物産画です。これはいくら文字で説明しても仕方ありません。本草学は、絵心を持っていないと自分が採集した薬草を残せません。今日のボタニカルアートという分野です。3つ目は、記録画です。幕末でよく残っているのは、小笠原の調査ですね。これは近代に入ると完全に写真家の役割になります。4つ目は報道画です。ペリーの来航、長崎へ来たプチャーチンの船の画像は残っているわけです。5つ目は、歴史画というのがあります。人物なり、風俗をその時代の歴史にあわせて描く。19世紀、歴史が民衆に意識され始めた時この歴史画が登場してくる。それから最後に絵図です。日本の場合には、正確であると共に見て楽しくなければ、地図ではないのです。これは日本の伝統ですが、フランスの地図作りも、必ず地図の中に景色とか建物を入れています。明治10年代にビゴーは地図づくりの絵師として陸軍省に招かれる。なにも風刺画を描きにきたわけではないのです。最後に写真が入るわけです。写真導入以後、幕末の絵師が絵と比べてどう考えたか、興味深い社会史の問題になるわけです。



宮地 正人

国立歴史民俗博物館・館長

中村 フセイン銅像が倒された時、テレビでは何億、十何億の人が見ていた。しかし、あるシンポジウムで見た遠景写真には、広場に100人程度しか人はいない。つまり、あれは作られた画像なのです。フレームの問題です。政治的事件などについて言えば、連続写真、ラッシュならよいという考えがありますね。それをどこか一箇所とると作為が入ってしまう。

宮地 文献に関する史料学はかなり確立しているので、何が本物なのかというのは、だいたいわかります。ただし、文献史料以外の資料学は写真も含めて十分確立していないままに、一人歩きしてしまっている。偽文書か本物の文書かという中間のところ、本物だけど、繰り返しそればかり出されると誤ったイメージを生み出すという、それをメディアイベントとメディア学の人には言っているようです。森村誠一さんの731部隊でもそうですが、一番足をすくわれるのは写真なのです。非文字資料におけるテキストクリティーク、資料学を、それぞれの特殊性に応じてどう確立するかが今最も問題なのです。

ヒストリーとは

中村 歴史家が対象にしているのは事実ではなく、表象だという歴史の言語論的転回論、歴史構築主義の議論があります。ある視点から構築したものが事実だということです。私は反対です。われわれ歴史研究者は資料を読み、資料間に連関をつけながら歴史像を描き、解釈します。違う解釈も成り立ちます。したがって、時間が経てば再審にさらされる。事実の確定が進んで学説がくつがえされることはありますが、解釈で学説がひっくり返ることはほとんどない。

宮地 第一次史料をできるだけ集め、読み、考え、研究するのが歴史研究者の一番の楽しみです。学問の蓄積の上に1頁を付け加えるだけです。歴史研究者は、職業家集団として過去に責任を負っているのです。これは信用して使える史料だ、しかしこれは偽文書だと明確に言えなければ、歴史研究者ではない。歴史研究者はなによりも職人だと思います。ろくなものも作れない人は、そこにいなければよいのです。

中村 問題意識を持って史料を見る必要があります。実証だけすればよいのではなく、何が真実かを見抜く力がないとだめだということです。ヒストリーの語源について、コルバンは歴史＝物語ではなく、臨床の記録だとい



中村 政則

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所教授

い、それに弁論術が結びついたという。面白い見解だと思いました。私は客観的な実在としてのthe historyを認めるのかどうか分かれ目だと思います。これに対し、「言語論的転回」では客観的事実があるのではなくて、記号をつけてはじめて人間の意識に入る。それで、はじめて存在が確かめられる。こういう議論ですね。それに対して私は、なにも名前のついてない星もあると思うわけです。そうでなかったら、太陽系自体存在しないことになる。だから、the historyはあると思っています。

宮地 歴史を専攻する人間は、事実にとだわる性向の人間がやるもので、拘泥しないか出来ない人は、やめたほうがいい。誰でも医者になれる訳ではないのと同じ論理です。

中村 宮地さんは新史料から新事実を発見するという職人的歴史家ですね。むかし遠山茂樹さんに、歴史家の社会的責任に言及した、「職人的研究者と生活的研究者」という好論文がありました。職人的歴史家でも文字資料だけでは豊かな歴史は描けない。非文字資料と組み合わせる必要があるわけです。非文字資料についても同じように、資料批判が必要だということです。

宮地 幸か不幸か、現在では両方できないと駄目だと思います。画像だけですと、印象批評になり、使いものになりません。それは評論家のやることで、研究者のやることではないのです。自分の作ったものは自分で責任をとる職人魂がないと駄目なのです。ただ現在では、夢にまで見たコンピュータ画像処理ができるようになり、文献資料と結合できる可能性が開かれ始めました。と同時



対談

に、歴史系民俗系博物館にはストーリーがないと、絶対に展示できません。しかも展示というのは、結論ではない、しかも中間段階のもので、論証するにはモノグラフが必要です。きちんと出典を示し、自分の論理構造がわかるように、一つ一つ論証しなければならない。博物館展示と研究報告は、不可分離的なペアになっているのです。博物館は面白いけれど、危険なところだということをおぼやかないといけませんね。展示はあくまでも中間的な成果発表、その根拠や論証は、論文・研究報告でまとめないと絶対に駄目です。

戦争展示の考え方

中村 そこで、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の戦争展示の考え方をお聞きしたいのですが。

宮地 歴博はナショナルミュージアム・オブ・ジャパニーズヒストリーですから、戦争展示があると対外的に思われています。これまではスタッフが前近代中心ということもあって、今一番新しい展示は、関東大震災ごろです。現代史展示をする方向は決まっていますが、ナショナルミュージアムですから、戦争が平和かの展示はしませんし、出来ません。事実に基づいた展示を通して、見る人の責任で判断してもらおうばかりありません。歴博があるところは、江戸時代の佐倉城、明治7年から歩兵第2連隊、日露戦争後からは歩兵第57連隊の跡地です。戦争一般の展示はスペース的にできないので、「佐倉連隊と地域民衆」というテーマで現在展示企画を考えています。このテーマを仲間と勉強する中で、一度虚心坦懐に軍隊の角度から近代日本を考えないと、本当の通史はできないのではないかと痛感しているのです。日本の近代化の起動力はやはり軍隊で、産業革命ではないと思います。軍隊というのは、明治初年に、二階建てのベッド式の兵舎で、着物の百姓が20歳から、徹底的に三年間の訓練を受け、そこで洋式下着を着用するなどの経験を経て近代化していきます。佐倉も、2500人の連隊の将兵を養う町として近代化していくのです。戦前の町の中で目立つのは、写真屋と靴屋です。将校は、自費で革靴をつくらせる。佐倉から西村勝三という、日本初の製靴企業家が生まれました。注文主は陸軍です。また、連隊は病虫害に強く安い野菜を大量に納入する農民のお得意さんでもありました。軍隊と地域との関係は意外と、奥が深いのです。

中村 山田盛太郎氏は、「戦前日本資本主義には、景気循

環はなかった、あったのは戦争循環だ」と言ったことがある。また軍隊と地域の関係では、荒川章二さんが『千葉県史』などを使って、日露戦争における各連隊の戦死者の具体例を調べていて参考になりました。

宮地 連隊関係の出版物はかなりあるのに、それがうまく収集されておらず、図書館にも入っていません。佐倉連隊は、西南戦争からレイテ玉砕まで参加していて、連隊史の歴史そのものが日本陸軍の歴史になるのです。

また、戦後連隊史を作っているところと、作っていないところがある。生き残った人が、自分の戦友を悼むかたちで、本にしたいか、したくないか。これもごく小さな例ですが、我々の周りには、あらゆるところに、戦争を考える手掛かり、資料があるのです。

中村 スミソニアン博物館の原爆展示はアメリカ在郷軍人会の反対があって、結局、原爆被害の実態は見せず、エノラゲイだけを展示した。原爆投下により戦争が早期終結して多くの兵士の命が助かったのだという彼等の声で展示が決まりました。戦争展示は、見る人によって意見は異なるでしょうから難しいですね。

宮地 企画展を行い、いろいろな立場の人の批判を仰ぐことはどうしても必要なことですね。

講談の面白さ、その背景

宮地 英米では小説家と歴史家の違いは明確です。中国は中国で歴史に対して非常に厳しい。日本はそうではありません。NHKの番組でも何かあると小説家が出てきて歴史を語る。国によって歴史の語られ方が違うのです。江戸時代は何を介して歴史を意識したかということ、「御記録」というものを介してです。家康がなぜ將軍になったかという、その正当談を繰り返し軍記物（軍書）で講釈する。当初は話の上手な素人が講釈していたのが、それが、民衆が娯楽を求めようになって、職業的講釈師が生まれるのです。ですから、日本人は講釈師の語る歴史を歴史として聞くのです。講釈師も、現実に起きた話をすぐ聞きたいという要望にこたえていく。字が読めない人が圧倒的ですから、話すわけです。ただし、町奉行所の同心も聞いていますから、変なことを言うと捕まります。明治以降の弁士中止と同じで、講釈師中止になってしまう。しかも講釈師は集めた材料を記録物として貸本屋に回していました。講釈師は史料編纂と歴史物の執筆に関係していたのです。材料を集めなくては話せま

せんでした。明治になると、新聞が彼らのネタになる。講釈師の話は民衆は口語体で聞く。講釈師は自分の話を文章化しないので、速記者がやるのです。それを起こすということで、明治19年に、講釈師の話や落語家の話を載せる新聞として、「やまと新聞」が出ました。日露戦争後になると、小説家自身が言文一致の文章を書き始める。小説自身が非常に広い読者にここで受け入れられ始めるのです。講釈師の面白い話を文章化しようとしたのが、講談社の野間さんの発想で、『講談倶楽部』が明治の末に創刊される。そこで初めて、「書き講談」というジャンルが出てくる。速記者が文章化したのを、『講談倶楽部』に載せるのですが、そこに浪花節の文章などを載せ始めると、やはり格が違う。落語家と講釈師の間でも当時は格が違いました。自意識が非常に強い人たちだから、講談師の方がボイコットしてしまう。それで初めて、文筆家に「書き講談」を書かせるということで、初めて歴史の語りが小説になり始める。それが時代小説に成長していくのです。日本人が歴史を聞く場合の聞き方とも関係があって、時代小説家が歴史を語る語り手になりました。「歴史は物語りだ」という言い方も、なにも新しいものではなく、日本では江戸時代からの、良かれ悪しかれ日本的伝統を受け継いでいるものなのです。ところで講談というのは、4日なら4日、10日なら10日、ぶっ通しで話さなければなりません。「講釈師、かたきや明日に、逃げのびて」と18世紀の川柳に既にあるように、話の起伏をつくらなければならない。そして起承転結です。話の発端は何か、結論は何か、盛り上げりをどうするか、歴史の叙述ではなくて、『三国志』、『水滸伝』など日本の民衆が楽しんできたフィクションが入ってきます。何が「因」で、何が「果」なのか。盛り上げ場所を盛り上げて、最後はやはり当時の価値観、しかも「講釈師中止」をくわらない権力批判の欠如したもので終わらないと、絶対講釈できませんでした。

中村 ゼミで阿部謹也さんの『日本人の歴史意識』を取り上げたのですが、興味が乗りませんでした。あれは世間論でした。軍記物と講釈師など日本人の歴史意識が書いてあったら、面白かったと思うのです。

博物館の情報論・人材論

中村 歴博の館長さんとして、我々のプロジェクトに対

するご意見をどうぞ。

宮地 今日、歴博が抱えている問題は歴史表象論です。資料を、いかに人に見せるか、しかもそれが学問的、科学的に間違いなく、どう可視化するのか。歴史表象論という学問を発展させるきっかけを、どこに作るかということです。歴史表象論を専門家のいないところでどう育てるかということです。このことは悪循環になりかねません。例えば、博物館が一番扱うのは技術史の問題ですが、学芸員養成でも美術史にはいくら専門家がいても、技術史はみな非常勤です。人材養成にしても、工学部は技術史には力を入れていませんし、教育学部は教育学部で、まったく自然科学の発想がない。このアポリアを解決できるかどうか。

2番目は専門的職業訓練とそのための資料学の問題です。ある特定の資料群を、全体として目録化する実践をやらないと、いくら理屈を言っても駄目だと思います。扱う材料のなかには、引札も、古写真も、文書もあります。ビデオもある。この全体をどう目録化できるか。この訓練の中で職人が養成されるのです。ただし資料学がなければ訓練できません。一番歴史で大事なものは、年月日の確定です。例えば、この写真は、裏に東京印刷局とある。東京印刷局はどこにあり、いつからいつまで市販写真を撮ったのかという資料研究を行わなければならない。文書あるいはマテリアルズを整理する資料学をつくっていかなければならない。私としては、本腰入れて写真の資料学というのをやりたいですね。特に明治前半、普通の素人写真が出てくる以前、コロジオン写真の段階はモノと資料を集めないと、一点一点の写真の年代がわかりません。そういう資料学を集団で研究しないと駄目な段階なのです。

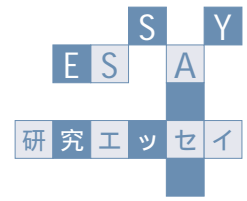
いまの学問段階で、アーキビスト養成だけでいいと思っている人はほとんどいないでしょう。非文字資料、画像資料も使い、われわれ博物館の人間とも一緒に行う資料学の緊急の課題はなにか、この検討が神奈川大学も含めて客観的に求められています。現状を一言で言うならば「史料の現段階に研究者が大幅に立ち遅れている」ということです。

中村 なるほど、そうですね。今日は貴重なお話をどうも有難うございました。



朝鮮時代の図像資料と風俗画

女性をめぐる眼差し



金 貞我 (延世大学博物館・客員研究員)

本COEプログラムが目指す幾つかの目標の一つに東アジア版生活絵引の編纂作業がある。私が主にかかわる仕事は、朝鮮時代の図像資料の中から生活の場面を示す資料を集め、韓国版の生活絵引を編纂することである。

朝鮮時代の庶民の生活を伝える図像資料としては、絵画資料として風俗画、仏画と宮廷の行事を記録した絵画の背景に点在する民衆の表現、そして農書、日記類などがあげられるが、風俗画以外の資料は意外と少ない。しかし、残された作例が比較的多いとされる朝鮮時代の風俗画も日本の近世に制作された豊富な風俗画類に比べれば、その量は決して多いとは言えない。というのは、朝鮮時代の風俗画制作の担い手は主に宮廷に属していた画院画家であり、朝鮮時代の後期に民間の工房が様々な風俗画を制作する前までは、風俗画の制作は非常に制限された範囲を越えることはなかったからである。従って、現存する朝鮮時代の風俗画は、当時の庶民の生活像を垣間見る上で極めて貴重な資料であると言わなければならない。そこで今回は、今まで収集してきた朝鮮時代の図像資料の中から、朝鮮時代の風俗画を代表する申潤福(1758~1803?)の女性の表現を取りあげ、朝鮮時代の風俗画を読み取る作業の一端を紹介することにしたい。

1 申潤福の描く女性とエロチシズム

申潤福の画歴は、宮廷画家で特に風俗画に優れていたということ以外はほとんど知られていない。現存する申潤福の作品は、画帖『蕙園傳神帖』(韓国、潤松美術館所蔵、国宝)の30点の他に多数の作例が伝わるが、その多くは女性を描いている。朝鮮時代の絵画作品の中でこれほど多く女性が画題とされたことは希有のことである。申潤福は、宮廷の画家でありながら卑俗な絵を数多く描いたことで画院から追い出されたと伝えられるが、彼の遺作を見ると、その伝承にうなずける。

画帖『蕙園傳神帖』の中の一点である「端午風情」(図1)は、申潤福の「卑俗」な表現を端的に表した作例で、絵は溪谷の一角で沐浴する半裸の女性たちを描く。体を露

にし、沐浴する女性の姿は、朝鮮時代を支配していた封建的な儒教のイデオロギーからみると、あまりにも破格であり、ショッキングな図柄である。朝鮮時代の絵画に稀にみるこのような大胆な表現は、ほとんどエロチシズムと結びつけて論じられている。画面の右下にさりげなく描かれた、物を運ぶ女性(服装からみて身分の低い下女であろう)も胸をさらす姿であるが(図2)この女性すらも「端午風情」のエロチシズム表現として取り扱われてきた。

ところが、封建的な儒教の道德倫理から身体を隠すことが厳しく要求された朝鮮の女性に、胸をさらすほどの露出が許されたはずはない。士大夫階層である両班の女性は自由に外出することは許されなかったし、庶民の女性ですらも肌を人にさらすことは少なかった。「端午風情」にみる、胸をさらして物を運ぶ女性の表現も、やはり、エロチシズムの表象なのだろうか。

2 胸をさらす女性

胸をさらす女はたびたび画題として登場する。蔡龍臣が描く「雲娘子像」は、嘉山の官妓であった崔蓮紅(1785~1846年)の肖像として伝えられるが(図3)、妓女であった崔蓮紅は洪景来の乱の時に官妓としての義理を守ったことから、妓籍から良民の身分に改められた。ところが、最も理想的な女性像を描き上げる時、画家が選択した図様は、胸をさらけ出し子供(男児であろう)を抱く姿である。この図像にはどのような社会的な約束言葉が働いたのだろうか。

朝鮮時代の女性にとって、子供を出産すること、特に男児を生産して家系を継承することは、最も重要な使命であった。同時にそれは女性を社会的に束縛するしきたりでもあった。嫁にいった女性が男児を出産できなかった場合は「七拳之悪」の一つを犯したことで、離婚の理由になる。朝鮮時代の女性における人生の最大の目標は男児を産むことであり、男児を出産した女性は女としての使命を果たしたことになる。出産後の豊満な胸は授乳

する子供がいるとの証明であり、男児を生んだ女性は堂々と胸をさらけ出し、街を闊歩できる。胸をさらす女性は、家系を支える将来の大黒柱、男児を生産した、立派な女性の表象である。

実際朝鮮時代の女性の服装は、授乳する子供を持つ女性には極端なまでに非実用的である。上半身を覆うチョゴリの丈は胸のあたりまでで、それを着るためには、胸を縛り付けなければならない。朝鮮初期のチョゴリは高麗時代の名残もあって、丈が腰の少し上までくるかなり長いものであったが、18世紀頃になると、袖は細く、丈は極端に短くなり、チマはより長く、膨らむ形になっていく。このような服装は妓女の間で流行し、後には両班、庶民にまで広がったという。朝鮮中期の革新的な女性のファッションは、男性から向けられた眼差しであり、その視線が注がれるのは胸ではなく、豊満な下半身であった。胸をさらす女性の姿は、現代の眼差しで眺めるエロチシズムではなく、儒教に呪縛された封建社会の視線と強く結びついていたのである。

胸をさらす朝鮮の女性は、20世紀初頭の朝鮮時代の風俗を伝える写真や絵葉書の中にも繰り返し登場する(図4)。欧米人や、植民地支配者の日本人の目に収まった数多くの写真には、極端なまでに短いチョゴリの下に胸をさらけ出して働いている姿がある。近代文明の観点からすれば、体のセンシュアルな部分を露出する女性の姿は、低俗・非文明に映ただろう。しかし、既婚の若い庶民の女性が胸をさらけ出すことは珍しいことではなかった。健康な出産能力の誇示であった胸をさらす姿は、育児とともに過酷な労働を強いられた庶民の女性の象徴でもあった。

3 韓国版の生活絵引き制作の事始め

以上、申潤福の「端午風情」にみる女性の図像を取りあげ、絵画資料のデコード作業の一例として触れてきた。韓国版の生活絵引の編纂においては、風俗画が図像資料の中心をなすことが予想されるが、その活用法には厳密に図像を読み取る作業が当然必要である。

初めて『絵巻物による日本常民生活絵引』を拝見した時の強烈な印象をいまだに忘れられない。絵巻の添景と共にあるはずの個々の図様を取り出して冷静に図柄だけに注目した、美術史研究とは異なる絵画資料の活用法に驚かされた。しかし、絵画資料から図像のみを切り取ったからといって、画家の創意から完全に自由になることはない。図像資料を視覚的に再現されたイメージとして取り扱う場合、文献資料と同様、厳格な資料批判が必要であることは言うまでもない。画家の様々な造形上の工夫によって虚実と現実の間を交差する絵は、同時代の鑑賞者には共通の言語として理解される。

しかし、時が変われば、図像が伝えるメッセージは本来の意味から離れ、たちまち迷宮に迷い込む。韓国版の生活絵引の編纂において、時の鑑賞者の視点から図様を再構築して観ることが求められる所以である。可能な限り朝鮮時代に身を置いてそのコンテキストの中で絵画資料を読んでいくこと。韓国版の生活絵引の制作の事始めにおいて、常にこの問題を意識しながら朝鮮時代の図像資料をデコードする作業に取りかかっている。

参考文献

- ジョン・ソナイ『朝鮮の性風俗』(韓国、図書出版ガラム、1998年)
 千野香織「嘲笑する絵画」(伊東聖子他編『女と男の時空』第2巻、1996年)
 釜山近代歴史館編『写真葉書でみる近代紀行』(2003年)



【図1】申潤福筆『蕙園傳神帖』「端午風情」
 韓国中央博物館編『風俗画』より



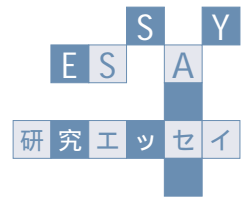
【図2】図1の絵の部分拡大図



【図3】蔡龍臣筆「雲娘子像」 韓国中央博物館編『風俗画』より



【図4】釜山近代歴史館編『写真葉書でみる近代紀行』より



長くなった日本人の脚？

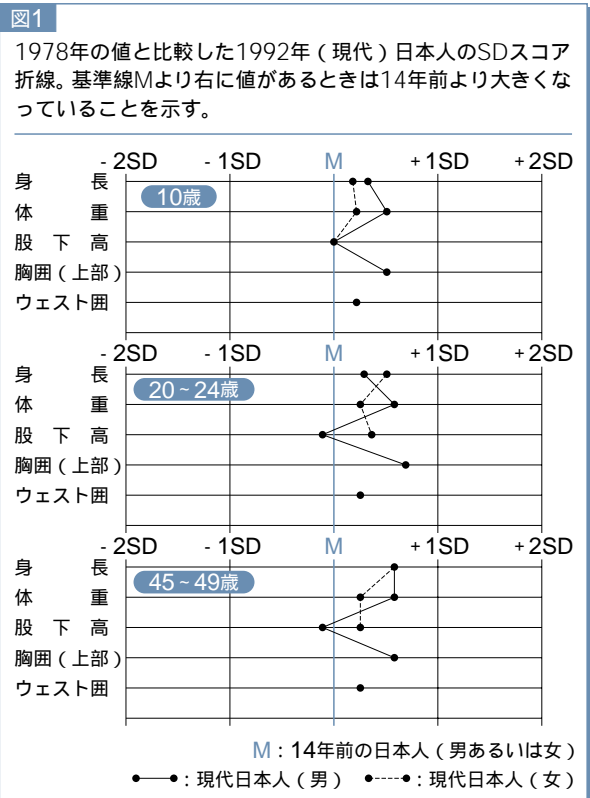
芦澤 玖美 (大妻女子大学人間生活科学研究所・教授)

私の専門は「生きた人間」の個体群（ポピュレーション）を研究対象とする生物人類学である。生きた人間は、進化の過程で自然環境やヒト自身が創り出した社会や文化に適応しながら今ある姿に到達したのであり、当然今後も変化し続ける。生物としてのヒトを研究する場合のアプローチも他の生物と同様いろいろである。研究対象を大別すれば、子ども、大人、老人の3段階があるが、子どもを対象にするのが成長学である。

さて、日本人の体の形の変化を、下肢（脚、股下高）に的を絞って、私の立場から見てみよう。成長学者の間では、大戦後の日本人の身長伸びが著しいことは有名である。成長学を築いたイギリスのタナー教授は、日本人の高身長化は脚が長くなったことによるとした。背が高くなった、脚が長くなったということは日本人のナショナリズムをくすぐるのかマスメディアが好む題材で、「この頃の若者は足が長い」（足ではなく脚のはず）と書きたがる。しかし実は高身長化は日本だけではなく、先進工業国に共通の現象である。もともと日本人より「あしなが」だった人々も栄養状態の改善などに伴い、さらに「あしなが」になって背が高くなっているのだ。

まず、日本人より「あしなが」な人の例を見てみよう。日本人学生の平均値と、私たちが調査したマリ共和国の大人の平均値をSDスコアというテクニックで比較すると、身長は男女ともにほぼ同じなのに脚は日本人の方が非常に短い。彼らの生活状況は決して良くないので、マリ人が「あしなが」であるのは好環境の影響ではなくて、遺伝的に受け継いできた体形である。

次に、約14年の間隔をおいて調査した旧通産省関係の日本人の資料(図1)から、10歳、20代前半、40代の変化をみると、背は男女とも僅かに高くなっているが、それ以外では明らかな違いがある。つまり、男ではどの年齢でも身長の伸び以上に体重と胸囲が増えたが、若い男性では股下高が4ミリ短くなっている。ところが女では体重の増え方は男より少なく、脚は若い女性では13ミリ、中年女性では7ミリ、中年男性では4ミリ長くなっているの

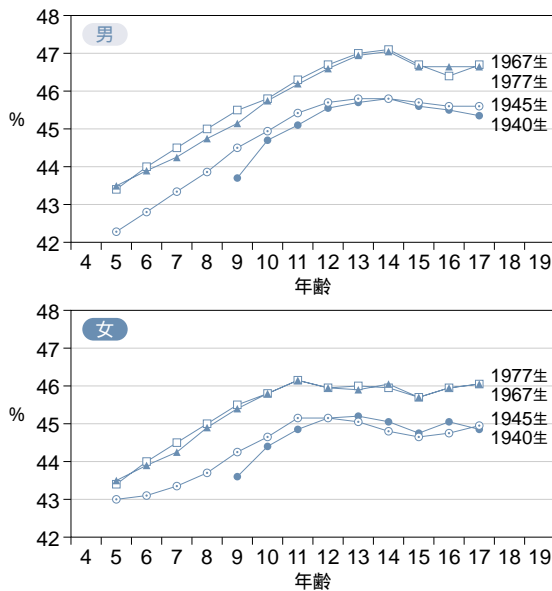


だ。ただし脚の伸びの程度は身長の伸びに較べ小さいので、身長に対する脚の長さの比をとると、女でも相対的な脚の長さは短くなっている。体重や胸囲のデータから、男の脚が短くなったのは胴周りや肩だけではなく、胴の底部にもしっかりと皮下脂肪が付いたためと考えられる。

このような時代変化は成長にどう現れるのかを確認するために旧文部省の資料(図2)から、戦前最も平均身長の高かった1940年生まれ、敗戦時の1945年生まれ、「もはや戦後ではない」1967年生まれ、そして1997年に20歳になった1977年生まれの4グループの値を追跡的に拾い出し、成長過程を観察した。概略的にいうとグループとグループの成長の間には明らかな時代差があり、これは日本の社会経済的な発展が子どもの体に変化を及ぼしたことを示す。ところがととの間の差は男女の身長と脚(身長/座高)、女の座高でほとんど消

図2

生まれた年(1940、1945、1967、1977)別に、身長を100としたときの脚(身長 座高)の比を年齢で追跡した図。男子の17歳代で1977年生まれの比が67年生まれの比より小さくなっている。これは脚の長さが相対的に短くなったことを表す。

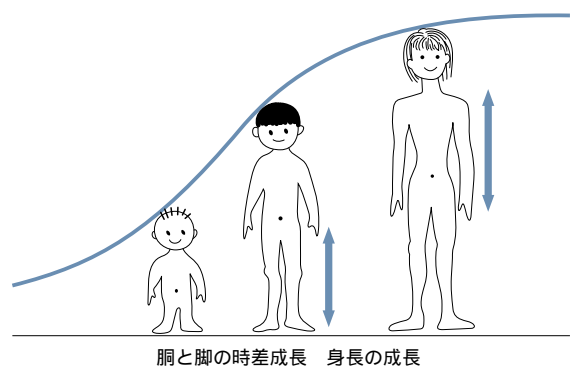


えているのに、男の体重(BMIも)と座高はこの10年間明らかに増え続けているのだ。そこで身長に対する脚の長さの比をとると、最近の子どもは脚が相対的に長くなっていることは事実であるが、この10数年来全く「あしなが」にはなっていないことが分かる。そしてここでも男女で明らかに異なった傾向が見られる。つまり女では17歳頃77年生まれの方が67年生まれよりごく僅かではあるが「あしなが」になる兆しがあるのに、男では15歳頃から77年生まれの方が67生まれより俗にいう「短足」になりだし、17歳代(高校3年生)でははっきりと10年前より見かけ上の脚が短くなっている。絶対値にせよ相対値にせよ、若い男性の脚が短くなっているという結果は通産省の資料でも文部省の資料でも同じであり、その原因も同じと考えられる(つまり肥満)。

この図を眺めていて思い出したことがある。それは、「この頃の若者は脚が長い」証拠としてマスメディアは中年の数値を引き合いに出すことである。この比は戦争前後に生まれた者では女で13歳頃、男で14歳頃、1960~1970年代に生まれた者では女で12歳頃、男で13歳頃が最大で、以後は小さくなっていく、つまり脚は成長末期では相対的に短くなっていく。人の一生を辿ると体の部位によって伸びる時期が違うから(私はこれを時差成長と名付けている)脚は思春期前に急激に伸びても高校生

図3

子どもの身長の伸びには、脚が長くなったために背が高くなる時期と、胴が長くなったために高くなる時期がある。



になると胴の伸びがこれに代わり、トータルとして背が高くなるというわけである(図3)。また肩の幅は身長の伸びの停止後も広くなり続ける。つまり子ども、若者、大人、老人は生物学的には別の段階にいるのだ。だから「この頃の若者は脚が長い」ことを立証するには、同じ生物学的段階の「昔の若者」と「今の若者」を比べなければ意味がない。いつの時代でも若者は身長に割に脚が長く、大人は相対的に胴長で、体の幅が広く分厚いのであって、これは何も今日的な問題ではない。

世の中がこうも脚の長さに興味を持つのは、どうも「あしなが」に格別の意義をみているからのようなのだ。しかし高身長化は上述のとおり日本人だけのものではない。同じ180cm身長のアフリカ人やヨーロッパ人と比較したら私たちは依然「あしなが」ではない。日本人を含むモンゴロイドの脚が相対的に短いのは生物としての必然的な理由があるからで、その価値は、脚が長いことをよしとする「美」意識とは無関係である。

それでは今後日本人の体形はどうなるのだろうか。結論として、男性の「短足化」は一層進むだろう。ここ十数年日本人の身長が伸び止まっていることは統計的に明らかだ。明日の食事もおぼつかなかった時代から抜け、日本人は背が高くなり、男女とも遺伝的に持っていた最大身長値、現在の遺伝子構成が変わらない限りこれ以上身長は伸びないという段階に到達したのだ。つまり、必要以上のカロリー摂取と、朝食抜きという不規則な生活を続ける若い人(特に男性)は、これ以上背が高くなることはなく、脂肪の蓄積、つまり体重増や胸囲などの増加に向かうというわけだ。適切な食生活と摂取エネルギーの消費を心がけないと、胴体底部にもしっかりと脂肪が付いた、ますます見かけ上の脚が短い、そして生活習慣病に悩む未来の日本人像が浮かび上がってくる。



近代天皇のイメージ形成 視覚情報分析の可能性について

増野 恵子（早稲田大学教育学部・非常勤講師）



非文字情報の一種である視覚的イメージのあり方は、18世紀末から19世紀にかけて根本的な変化を生じたといえるだろう。画像を正確かつ精緻に、しかも低コストで大量に生産する技術が次々と発見され、その結果かつてない量の視覚的イメージが社会にあふれることになった。最も重要な発明の一つは言うまでもなく写真であるが、印刷・版画技法もこの時期めざましい発達を遂げている。過去の版技法とは一線を画する石版術がドイツのアロイス・ゼネフェルダーによって発明されたのは1798年、また凸版印刷の一種である木口木版の技法がイギリスのトマス・ビューウィックによって改良されるのもこの頃である。これらの技法は、銅版に代わって本や新聞の挿絵制作に用いられた。他にも、多色印刷や写真製版といった数々の重要な発見がなされたのがこの時代である。

この大規模な変革は、新聞・雑誌といったマス・メディアの発達と軌を一にしている。だがこの画像生産技術の革命は、単に視覚情報の量的な変化をもたらすだけではない。ある視覚的イメージが大量に生産され、流通し、消費されることにより、それらの画像は文字とは異なる情報を盛りこんだ一つのメディアとして機能し、同時代人々の欲望や興味のありようを忠実に反映することになるのである。これは近代の社会構造の変化とも深く関連していると思われるが、社会のなかで広範囲に普及した視覚的イメージを分析の対象として、同時代人々の心性を解明することができるのではないだろうか。

そのような視覚イメージを読み解く試みとして、以下一つの事例を示してみたい。それは、明治天皇の肖像についてである。

明治5年(1872)と翌6年(1873)当時最も有名な写真師であった内田九一によって明治天皇の姿が撮影された。周知のように生前の天皇の姿が、公開を前提とした肖像に表わされるのはそれまでに前例のないことであった。政府はそれまでの慣習を覆し、天皇の姿を国民に積極的に示し、広く周知させることを方針としたが、その手段に写真が用いられたのである。政府は後者の写真を

公式の肖像と位置づけ、内外の機関や申し出のあった各府県に交付した。交付された府県の中には、それらの写真を日時を決めて住民に公開したところもあったという。

本来、これらの写真の原版と紙焼きは宮内省内で管理されているはずであった。しかし、話題の人物である天皇の姿を見たい、知りたいという人々の欲望は、写真というそれまでとは異なるリアルなイメージを放つてはおかなかった。内田が撮影した天皇肖像は外部に流出し、様々な人の手によって複写が重ねられ、町の写場で役者や芸者の写真とともに販売されるに至る。一方は元首の肖像として仰ぎ見られ、もう一方は当時世間の注目を集めた人物のプロマイド、つまり商品として消費されるという違いはあれ、それまで宮中の奥深く秘匿されてきた天皇の姿は、いずれも写真という複製イメージによって一般に知られることになったのである。

しかし当時の写真は、それまでの画像複製技術と比べると、画像のサイズが小さい、簡単に褪色する、モノクロームしか表現できない、などの欠点があった。やがてこれらの欠点をカバーし、なおかつ写真と似通ったリアリティを持つ商品が、新しい複製技術により登場する。それが明治中期に流行した石版画であった。

冒頭に述べたように石版は18世紀末のヨーロッパで発明された印刷技法であるが、日本では明治の初年に民間の版元がこの技術を導入し、観賞用の一枚刷り版画を制作・販売するようになって大変な人気を博した。そこで取り上げられた主題の多くは錦絵と共通していたが、なかには石版画独自の主題も存在している。その一つがこの天皇の肖像である。石版による天皇肖像が描かれるきっかけは明治14年(1881)の第二回内国勸業博覧会にあった。ここに天皇の肖像を描いた石版画が出品され、世間の評判を呼んだことから、その人気を当て込んだ他の版元が同様のスタイルの版画を次々発行し、これをきっかけに天皇肖像というジャンルが形成されていった。

では、その典型的な作例を見てみよう(図1)。中央に天皇、その下、左右に皇后と皇太后の半身像が楕円形の

縁取りの中に描かれており、その周辺には、同様の形式で描かれた政府の首脳が三人の周囲を囲むように配される。これ以外にも天皇・皇后の組み合わせ(図2)や、天皇や皇后、皇太子が各々単独で描かれるなど様々なパターンが存在するが、半身像はほとんどの場合周囲を枠で囲まれ、四分の三正面を向いている。天皇・皇后・皇太后は繰り返し描かれるが、その表情やポーズはどの作品においても大きな変化はない。

明治の石版画で用いられるのは「砂目石版」と呼ばれる技法だが、これは繊細な陰影表現を特徴とし、東洋画よりも西洋画、さらには写真的な表現に適していた。前述した人物のポーズからも、これらの肖像は当時販売されていた写真を元に描かれたものであると推測される。当時、大衆的な視覚情報の代表格であった浮世絵でも、時事ニュースのなかに明治天皇の姿が描かれた。しかしその姿は作品によって大きなばらつきがあり、天皇個人の容貌を忠実に表しているとはいえない。それに対し写真のようにリアルで、しかも写真以上に鮮明で大きな画面でありながら比較的廉価であった石版画に、当時の人々は新鮮な驚きと魅力を感じたことだろう。

かつてないほどリアルに天皇の容貌を写し出した石版肖像は、明治10年代半ば以降も制作が続けられ、明治22年(1889)の大日本帝国憲法発布という大イベントの前後には再び大量の作品が売り出される。これらの作例を追っていくと、非常に興味深い事実が見えてくる。

まずこれらの肖像画は額装や、時には軸装されて鑑賞の対象となっていたこと。そして石版の天皇像は、繰り返し描き続けられることで、いつしかその容貌が理想化されていったことである。明治14年に石版の天皇肖像が話題になった際、これを報じた当時の新聞記事は、天皇肖像を額装や表装すれば室内に掲げることができると述べており、また実際にそのような鑑賞方法がとられていた。そして初期と後期の作例を比べると、天皇の容貌はリリしく整った典型的な顔立ちへと徐々に変化している(図3)。

明治21年から22年にかけて、御雇い外国人エドアルド・キヨッソーネの手によって新しい天皇肖像が制作された。十数年ぶりに制作された天皇・皇后の肖像は、のち厳格な礼拝儀式によって神格化されていくが、この「御真影」と明治6年の肖像との落差をつないだのは、実は民間で制作されたこれらの天皇肖像画ではないだろうか。そこには、お仕着せではなく人々が消費者という立場から望ましい君主像を作り出し、積極的に受容していったという構図が見いだせるのである。

近代の大衆的な視覚情報はテキストに比べれば無視されることも多い。しかしそれらを注意深く分析することによって、新たな知見が得られる可能性はまだ存在している。三班の災害図像の研究においても、同様の手法を用いてなんらかの成果が挙げられないか、現在模索中である。



図1

「皇国貴顕紳紳肖像」明治14年(1881)楠山秀太郎版・個人蔵



図2

「明治貴顕之図」明治19年(1886)水口龍之助版(財)黒船館蔵



図3

「帝国貴顕御肖像」明治23年(1890)有山定次郎版・個人蔵



上海史研究と『良友』画報について

孫 安石（神奈川大学大学院外国語学研究科・助教授）



1 上海史研究の事始め

中国近現代史のなかで都市「上海」ほど特異な発展を成し遂げた街があるだろうか。上海は様々な顔をもつ。租界に代表される植民都市であり、中国共産党が成立した革命都市であり、中国人・欧米人・日本人・ロシア人などが同居する国際都市でもあった。また、文化大革命期間中の1967年には造反派による「上海コミュン」が宣言されたのも上海であった。そして、改革開放政策が絶好調を迎えた上海はいま浦東新区の高層ビルで代表される建築ラッシュの中で新たな進化を成し遂げる未来都市の様相を呈している。

このような上海近現代史の激変の源流をさかのぼれば、誰もが欧米諸国によって設定された租界という特殊な空間の存在に突き当たる。この租界（または「居留地」と呼ばれた）という特殊な空間は、時期によっては異なるが、中国、日本、朝鮮にもそれぞれ存在しており、中国の上海、日本の横浜、神戸、朝鮮の仁川などの外国人居留地は広くその存在が知られている。ところが、この租界の評価をめぐるのは、欧米列強による国家主権の侵害という評価と異文化交流の場としての役割を積極的に評価しようとする二つの動きが常に拮抗してきた。

改革開放以降の中国の変化を歴史学研究という分野から眺める時に、その最も大きな変化は租界の役割に関する解釈をめぐる展開されたと言っても過言ではない。1980年10月に天津で開催された「中国地方誌研究会準備会」は、中国の17省・市の地方史研究者50余名が参加した新中国建国以来の最大規模の地方史研究座談会であったが、ほぼ同時期に上海では上海史研究の再開を論じる座談会が開催され、未開拓の「露天鋸脈」であるShanghaiology（上海学）の創生が議論されていたことは注目に値する。⁽¹⁾この議論は1986年には上海社会科学院の熊月之氏によって上海の租界が近代中国に与えた積極的な影響を再評価することを提起する動きへと発展する。上海史研究の事始めである。そして、2001年12月には上海市档案馆によって国際シンポジウム「租界と近代上海」が開催された。

同シンポジウムで報告された多彩な論文のタイトルを眺めれば、中国の都市史研究が新たな段階を迎えていることを垣間見ることができる。⁽²⁾

2 革命史研究から生活史研究へ

従来の革命史と政治史を中心にしたイデオロギー研究の呪縛から解き放された上海史研究は、経済分野を中心に多くの研究成果が蓄積されたが、いまは社会史と生活史の分野にその研究の中心が移っているといえよう。このような上海史研究の変化のなかで、最も刮目すべきことは多くの新たな写真資料が発掘され、出版されたことであろう。例えば、唐振常主編『近代上海繁華録』（商務印書館国際有限公司、1993年）、潘光主編『猶太人在上海』（上海画報出版社、1995年）、上海市档案馆編『追憶 近代上海図史』（上海古籍出版社1996年）、上海図書館編『老上海地図』（上海画報出版社、2001年）、『老上海』（上海教育出版社）など多くの写真集が出版された。

筆者も編者の一人として関わった『日本僑民在上海』（上海古籍出版社、1998年）は上海の日本人コミュニティを政治・経済・社会・文化の写真資料から眺望することを試みたものである。この写真集を出版するときに、最も注意を払ったのは写真の出典を確かめることであった。複製され大量に消費される写真の特性からオリジナルの写真を特定する作業がぜひとも必要であったからである。

3 『良友』画報（1926年～1945年）の世界

ところが、20世紀前半の都市上海の自画像を写真などの図像を通して描きだそうとする時に、『良友』画報というグラビア雑誌の存在はきわめて重要な位置を占める。『良友』画報が注目される理由は1920年代から1940年代にいたるまでの都市上海の生活が同雑誌に凝縮されていると考えられるからである。中国近代史において写真を多用した大型総合グラビア雑誌がこれだけ長期間にわたって発行されたのはきわめて異例のことである。

『良友』画報は1926年2月に創刊され、1945年10月ま

で計172号を発行したが、その記事は中国の政治・経済を含むニュースは勿論、社会・生活に関する大量の図像情報を盛りこんでいる(図1)。とくに、この『良友』が創刊された1920年代は中国で大衆社会の到来とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、都市を舞台に中産階級が生まれ、彼等の娯楽としてラジオと映画や百貨店などが登場する時期とも重なる点、注目されよう。

紙面の関係で、ここでは『良友』画報の記事を全面的に紹介することはできないが、幾つかの特徴的な内容を紹介することにしたい。

『良友』画報が上海の都市生活を伝える時に最も多くの紙面を割いたのが映画(電影)という新しいメディア媒体の紹介であった。1920年代から1930年代にかけて上海では、従来の印刷を媒介にしたメディア媒体(新聞、雑誌など)に加え、映画とラジオ放送などの新しい大衆媒体が次々登場し、人々の生活に大きな影響力を及ぼし始めた。ハリウッド映画が映し出す欧米人の生活スタイルは、上海の人々に新しい時代の到来を告げるものであったが、『良友』画報はその時代の流れを敏感にキャッチしていた(図2)。

その次に注目されるのは、『良友』画報が上海の消費生活を象徴する様々な広告を掲載していることである。その代表的なものが商品販売と娯楽の面で新しい商業文化を創造したと評価される百貨店関係の広告であろう。上海を代表する繁華街南京路に遊興設備として有名な「大世界」と「新世界」が営業を開始し、先施公司(1917年)、永安公司(1918年)、新新公司(1926年)、大新公司(1936年)などの百貨店が次々と開業することで上海は新たな消費文化の発信地としての役割を担うことになる。最新式のショーウィンドウ陳列による物品の販売だけではなく、ホテルとレストランを経営し、屋上には花園を設けている新新公司是『良友』画報の創刊号に「中国最新式大商店」をキャッチフレーズにする広告を掲載し、上海経済の黄金時代をうかがわせてくれる(図3)。

また、『良友』画報は都市上海の変容と女性の社会活動の関わりについても興味深い資料を提供してくれる。『良友』画報は世界のファッションの潮流を中国国内に紹介することに力をいれ、また、映画俳優の服装や化粧などについても多くの紙面を割いて紹介している。その端的な表れが、毎号の表紙の写真飾る美しい化粧のモダンガールであったことであろう。『良友』に登場する女性像は旧い時代の纏足で代表される旧女性ではなく、化粧をし、仕事をもち、美容室に通う消費社会をたくましく生きる

新女性そのものであった(図4)。

『良友』は従来の新聞雑誌が政治、経済などの報道に重きをおいたこととは違い、写真を多用することで、誰もがどこでも読める生活雑誌を目指し、時代をリードすることができた。20世紀の初頭、上海で花開いた都市の中産階級こそが『良友』画報の読者であったといえよう。都市上海の自画像を求める作業は『良友』画報を軸にしばらく続く(『良友』画報の研究会の活動についてはhttp://www.kanagawa-u.ac.jp/05/ken_gengo/02.htmlを参照)。

参考文献

- (1) 上海社会科学院歴史研究所他編『上海史研究通訊』第1輯、1980年12月)
- (2) 同シンポジウムの記録は上海市档案馆編『租界里的上海』上海社会科学院出版社、2003年として出版された。



図1

『良友』画報の創刊号(1926年2月15日)の表紙



図2

ODEON映画館の広告(『良友』創刊号より)



図3

上海新新公司(百貨店)の広告(『良友』創刊号より)



図4

「美容術の技巧」(『良友』第86号より)



モバイルエージェント間通信のトラフィック

能登 正人 (神奈川大学大学院工学研究科・助教授)

1 はじめに

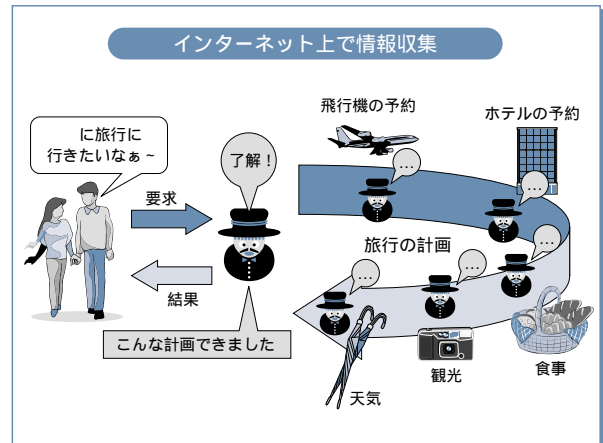
近年のネットワーク技術の急速な発達により、コンピュータの利用形態は、単体で使用するというよりも、インターネットやLANなどのネットワークを介して使用する環境になった。特に、光ファイバや非対称デジタル加入者線 (ADSL) を利用したサービスなど、定額制によるブロードバンド (大容量高速通信) 回線の普及を背景に、比較的容易に大容量データを扱うことが可能となり、インターネットの利用者は急激に増加している。また、ネットワーク端末の小型化により、携帯電話に代表される移動体通信からもネットワークに接続することが可能となっており、利用者の増加により通信量が増大している。そのため、高品質な画像や音声などといった大容量データを扱う場合には、ブロードバンド時代といえども通信トラフィックの性能評価を事前にきちんと実施し、有線無線に関わらず効率よくデータをやり取りする必要がある。

このような背景のもと、ソフトウェア基盤技術においても、時代の要請に応じた新しい研究テーマが生み出されてきている。エージェント技術もその一つであり、高品質で信頼性の高い分散型ソフトウェアを構築するための新しいソフトウェア構造モデルとして期待されている⁽¹⁾⁽²⁾。以下、モバイルエージェントと呼ばれる移動性を有したエージェントに着目し、モバイルエージェント間通信のトラフィック特性について述べる。

2 モバイルエージェント

2.1 エージェントと分散制約充足

エージェントは、周囲の環境に応じて自らの目標を設定し、この目標のために活動する計算機上のプログラムであり、自律性、協調性、柔軟性、移動性などの擬人的な性質を持つ新しいソフトウェア構築方法論におけるソフトウェアの構成単位である。エージェント技術の進展は著しく、最近では、エージェント自体が利用者の代理人としてネットワーク上を自律的に移動しながら特定の



タスクを遂行するモバイルエージェントと呼ばれるコンピュータ間の自律的移動性を有したプログラムが容易に開発できるようになってきた。しかし、その反面、通信トラフィック特性をこれまで蓄積されてきた知見から理解することは困難になってきている。したがって、エージェントの移動性までを考慮したトラフィック特性を評価する方法論を早急に確立する必要がある。そのためには、当面はその基礎となる知見を種々のケーススタディを通じて蓄積する必要があると考える。

本稿では、そのケーススタディとして、分散制約充足を取り上げる。分散制約充足は、その基礎となる制約充足問題⁽³⁾の各変数をネットワーク中の各エージェントが決定すべきものとして分散化させたものである。すなわち、各エージェントが近傍のエージェントと通信しあいながら全体的な制約を満たすように自らの状態 (変数の値) を決定する問題である。これは十分に抽象的で簡明なモデルである一方、エージェントの行動が事前に静的には決められておらず、周囲の状況に依存して機会主義的に動的に決定される点で十分に複雑な計算モデルであるといえる。最終的に確立されるべき方法論は、少なくともこのモデルについても有効に適用可能であることが必要条件となるであろう。したがって、本研究では、最初に取り組みべきケーススタディとして分散制約充足が適切であると判断した。

2.2 モバイルエージェントの特徴

モバイルエージェントを用いてコード転送し、それぞれのホストでその転送されたコードを実行するためには、セキュリティ保護、障害対策、トラフィック増加、管理の手間の増加といった問題が複雑化する。しかしながら、不安定で間欠的な通信路を常時使用する必要がなく、通信コストの削減が可能となるなどメリットが大きい。その理由は、従来のクライアント/サーバ方式とモバイルエージェント方式の二つの処理形態を比べることにより、容易に理解することができる。

クライアント/サーバ方式では、毎回の要求と応答がネットワーク上を行き来するため、ホスト間の接続は、常時維持しなければならないのに対して、モバイルエージェント方式では、エージェントが移動するときだけ接続を確立すればよい。これは、電話回線でモデムを利用する場合の通信や、無線を利用しているため接続が不安定な携帯電話、移動体通信などの通信形態にとっては非常に有利である。

3 エージェントの移動と通信量

現在、エージェントの移動性と分散制約充足を関連付けた研究例はないため、研究の第一歩として、いつ・どこへ・どのような目的でエージェントを移動させるかという問題に対して、基本的な考察・検討をする必要がある。エージェントが移動する条件として考えられる基本的なものとしては、「時間による移動」「準局所最適時の移動」「メタレベルからの移動要求」「計算負荷による移動」「通信量による移動」などがある。その中から、本稿では、実ネットワーク中を流れる総通信量を抑制する目的で移動するケースである「通信量による移動」に焦点を当てる。そして、分散制約充足を行う協調システムに基づくエージェント間通信モデルを構築し、計算機シミュレーションによりこのモデルに基づく移動が総通信量に与える効果について定量的な評価をする。シミュレーション実験では、分散制約充足問題の代表的な例題である分散グラフ色塗り問題を用いた。グラフ色塗り問題とは、任意のグラフと色数が与えられ、グラフ上の隣り合うノードを異なる色によって塗るものである。このグラフのノードをエージェントに見立てることで、分散グラフ色塗り問題のエージェントネットワークが得られる。

本研究では、基盤となる分散制約充足アルゴリズムとして分散ブレイクアウトアルゴリズム⁽⁴⁾を仮定し、シミュレーション実験により総通信量を測定した。その結果、

以下のことが確認できた。なお、紙面の制約上、シミュレーション実験の詳細については載せることができないため、興味のある方は文献⁽⁵⁾を参照されたい。

1. 総通信量は、一般にリンク数の増加とともに急激に増加し、ピークに達した後急激に減少する。その後緩やかに増加し、やがて緩やかな減少へと転じる。
2. リンク数が未知の場合、上限として定義したある値よりもエージェントサイズが十分小さいならば、移動により総通信量を概ね削減できる。逆に、エージェントサイズが十分大きいならば、移動することで総通信量はかえって増加する。
3. 総通信量がピークとなる困難な問題に対しては、エージェントサイズがある程度大きくても総通信量を抑制できる。

4 おわりに

最後に、本研究に直接関わる短期的な研究課題をいくつか挙げておく。今回提案したアルゴリズムをどのように精密化するというその通信量抑制につながるかは興味あるテーマである。また、1つのホストに多数のエージェントが集中すると、CPUタイムが各エージェントに分配されるため、1エージェント当りの計算スピードが減少することになるが、本稿では無視したこの効果を取り入れたモデルの開発ができれば、エージェントを特定のホストに集中させないメカニズムとその効果が分析可能となる。

参考文献

- (1) 本位田真一, 飯島 正, 大須賀昭彦: エージェント技術, 共立出版(1999)
- (2) 木下哲男編: エージェントシステムの作り方, 電子情報通信学会(2001)
- (3) A. K. Mackworth: Constraint Satisfaction, in S.C. Shapiro ed., Encyclopedia of Artificial Intelligence, pp.285-293, Wiley-Interscience Publication, New York(1992)
- (4) 横尾 真, 平山勝敏: 分散breakout: 反復改善型分散制約充足アルゴリズム, 情報処理学会論文誌, Vol.39, No.6, pp.1889-1897(1998)
- (5) 能登正人, 沼澤政信, 栗原正仁: エージェントの移動性を考慮したエージェント間通信のトラフィック量に関する実験と評価, 電気学会論文誌C, Vol.124, No.3, pp.904-911(2004)



2003年度 外部評価と対応策

本学COEプログラムは静岡大学情報学部 八重樫純樹教授、国立歴史民俗博物館 常光徹助教授を外部評価委員に委嘱し、2004年2月21日に外部評価を実施した。当日はチェックシートに基づいて、具体的な問題点を指摘して頂いた。さらに後日両氏から下記のような評価報告書が届けられた。



外部評価報告 1

八重樫 純樹

1. 課題と組織化・活動について

(1) 課題について

“非文字資料”について、民俗学と歴史学周辺の専門家の世界では、これで課題の意味が十分に理解されるものと考えますが、全く別な専門分野（社会・経済学分野や理工学系）および社会一般の人々にはわかりにくかったり、誤解を招く恐れもあります。ここにおける定義をホームページや刊行印刷物等の目に付く所に具体的な解説が必要と感じる（“非文字資料”だけだと考古学資料も美術工芸品も入ってしまう）。

(2) 組織化と研究拠点について

現状の日本常民文化研究所、歴史民俗資料学研究科、外国語学部のスタッフから考え、十分であり、学内事務組織の協力体制も可能な限り支援しており、始まったばかりの研究であり、これで十分と考えます。しかし、学内専門家数は有限であり、テーマから広範な専門分野の協力が必要である。今後の4年間に所定の成果を得るには、学外専門家の組織化・体制作りが必須と考えます。また、人文科学系研究者は個人研究がほとんどであり、組織研究が下手なので、そこが心配です。また、学内協力組織同士の揉め事は研究の足を引っ張る源ともなります。

2. 研究事業について

当座、始まったばかりであり、下記4項目で適当と考え、まずまずの進行状況と考えます。しかし、今後、以下を留意する必要があるものと考えます。

(1) 外部研究者の協力体制

1. でも述べましたが、研究方法に幅広く、色々な分野の専門家の意見を取り入れる必要があります。歴史学、民俗学研究方法の世界の常識は、他分野の研究方法论から相当遅れている部分も少なくないと考えます。学外協力専門家は固定の部分（データ収集、データベース作成等）と流動（方法论や調査活動等）の部分が必要で、組織を常に新鮮にして活動しなければ成果は期待できません。

(2) データベース構築の組織化

情報公開の研究作業（データベース構築）は、いずれ来年度あたりから4本の研究事業の共通組織として、独立させる必要があるのではないかと考えます。研究活動と“情報整理”を一緒にすると、混乱してくるのではないかと心配です。特に、文系研究者は目先の研究にだけ神経を注ぎ（論文作りはするが）、重要な情報の一般化整理には興味を示さない場合が多い。また、この程度の補助職員の数ではデータベースは出来ません。データベース構築は人海戦術であり、外注構築するにしても、数人の専門活動要員が継続的に必要です。

(3) データベース構築と世界のデータベース動向への配慮

情報整理(データベース)は、現在インターネットの世界的普及により、データそのものの規格化が急速な勢いで進行しています。これにそぐわないと世界的孤立化を招きかねません。十分に注意と配慮が必須です。しかし、今まで、特に日本民俗学の世界では本格的な民俗資料データベース研究が殆どなされてきてないので心配です。

(4) 各研究事業について主な点

- (a) 1班 画像データ作成と用語辞書作成が必須。国立公文書アジア歴史資料センターが参考事例。
- (b) 2班 モーションキャプチャーは、ロボット工学や立命館大学のCOE研究が事例参考に。
- (c) 3班 GISやグラフィックス技術の応用が必須と考える。

(4月から東京国立博物館で行われる(仮称)九州国立博物館の紹介展示の中に、装飾古墳データベースの参考事例が。また、3月27日~28日に奈良市帝塚山大学で開催される日本情報考古学会第17回大会の発表にいくつか参考事例が)

- (d) 4班 日本民俗学では資料と情報の体系化の研究がなされてこなかった。来年度早々から、本格的着手が必須。学外専門家を交えたワーキング組織化と本格活動着手が必須。同時にデータ作成の規準化設定(データ台帳作成マニュアル)も必須。文字資料はどうかになるが、非文字資料は大変な問題を含んでいます。

外部評価報告2

常光 徹

1. 本プログラムの名称は、人間活動の文字化されない領域を対象として資料の体系化を図るという構想に照らして相応しいが、ただ「非文字資料」という言葉は、一般にはなじみが薄くその内容を具体的にイメージしづらい。広く知ってもらうためにも、非文字資料とは何かを分かりやすく説明する工夫をしたほうがよい。
2. プロジェクトの目的に沿って、各種の資料を精力的に調査し収集を進めている点は評価される。資料の蓄積にともなって、収蔵庫をはじめとして整理や分類作業のためのかなり広い空間の必要が予想されるが、現在の施設では十分とはいえない。併せて、COE支援事務室と担当教員の研究室との関係が機能的な配置となっているかどうか、検討の余地がある。
3. 研究の全体計画、および4班構成、事業推進者の編成は本プログラムを推進していく上で適切なものと考えられるが、実際の活動をより円滑に展開していくには、組織面において日本常民文化研究所等との関係のあり方を明確にして、さらに総合力を高める必要があるのではないかと。
4. 各班の目標の明確度には差があるが、いずれの班も目標の達成に向けて調査・研究活動を活発に展開している。ただ、5年間という限られた時間のなかで、何をどこまでできるのか早い段階でその可能性を検討し、場合によってはテーマを絞ることも必要ではないかと。
 現地調査等については、その計画や成果が常にプロジェクトの目標の達成とどう関わるのか(関わる可能性があるのか)という意識のもとに綿密な検討がなされ実施されている点は、当たり前のことではあるが重要であり評価される。
 研究活動を推進していく上で、構成員については必要性に応じて強化したほうがよいと思われる。4班ではコンテンツを担当する教員の補充。
5. 若手研究者育成のプログラムや条件は概ね妥当だと考えられるが、実際にどのような研究活動や作業を行っているのかが見えにくい。



2003年度 外部評価と対応策

本学COEプログラムは静岡大学情報学部 八重樫純樹教授、国立歴史民俗博物館 常光徹助教授を外部評価委員に委嘱し、2004年2月21日に外部評価を実施した。当日はチェックシートに基づいて、具体的な問題点を指摘して頂いた。さらに後日両氏から下記のような評価報告書が届けられた。



外部評価報告1

八重樫 純樹

1. 課題と組織化・活動について

(1) 課題について

“非文字資料”について、民俗学と歴史学周辺の専門家の世界では、これで課題の意味が十分に理解されるものと考えますが、全く別な専門分野（社会・経済学分野や理工学系）および社会一般の人々にはわかりにくかったり、誤解を招く恐れもあります。ここにおける定義をホームページや刊行印刷物等の目に付く所に具体的な解説が必要と感じる（“非文字資料”だけだと考古学資料も美術工芸品も入ってしまう）。

(2) 組織化と研究拠点について

現状の日本常民文化研究所、歴史民俗資料学研究所、外国語学部のスタッフから考え、十分であり、学内事務組織の協力体制も可能な限り支援しており、始まったばかりの研究であり、これで十分と考えます。しかし、学内専門家数は有限であり、テーマから広範な専門分野の協力が必要である。今後の4年間に所定の成果を得るには、学外専門家の組織化・体制作りが必須と考えます。また、人文科学系研究者は個人研究がほとんどであり、組織研究が下手なので、そこが心配です。また、学内協力組織同士の揉め事は研究の足を引っ張る源ともなります。

2. 研究事業について

当座、始まったばかりであり、下記4項目で適当と考え、まずまずの進行状況と考えます。しかし、今後、以下を留意する必要があるものと考えます。

(1) 外部研究者の協力体制

1.でも述べましたが、研究方法に幅広く、色々な分野の専門家の意見を取り入れる必要があります。歴史学、民俗学研究方法の世界の常識は、他分野の研究手法論から相当遅れている部分も少なくないと考えます。学外協力専門家は固定の部分（データ収集、データベース作成等）と流動（手法論や調査活動等）の部分が必要で、組織を常に新鮮にして活動しなければ成果は期待できません。

(2) データベース構築の組織化

情報公開の研究作業（データベース構築）は、いずれ来年度あたりから4本の研究事業の共通組織として、独立させる必要があるのではないかと考えます。研究活動と“情報整理”を一緒にすると、混乱してくるのではないかと心配です。特に、文系研究者は目先の研究にだけ神経を注ぎ（論文作りはするが）、重要な情報の一般化整理には興味を示さない場合が多い。また、この程度の補助職員の数ではデータベースは出来ません。データベース構築は人海戦術であり、外注構築するにしても、数人の専門活動要員が継続的に必要です。

(3) データベース構築と世界のデータベース動向への配慮

情報整理(データベース)は、現在インターネットの世界的普及により、データそのものの規格化が急速な勢いで進行しています。これにそぐわないと世界的孤立化を招きかねません。十分に注意と配慮が必須です。しかし、今まで、特に日本民俗学の世界では本格的な民俗資料データベース研究が殆どなされてきてないので心配です。

(4) 各研究事業について主な点

(a) 1班 画像データ作成と用語辞書作成が必須。国立公文書アジア歴史資料センターが参考事例。

(b) 2班 モーションキャプチャーは、ロボット工学や立命館大学のCOE研究が事例参考に。

(c) 3班 GISやグラフィックス技術の応用が必須と考える。

(4月から東京国立博物館で行われる(仮称)九州国立博物館の紹介展示の中に、装飾古墳データベースの参考事例が。また、3月27日~28日に奈良市帝塚山大学で開催される日本情報考古学会第17回大会の発表にいくつか参考事例が)

(d) 4班 日本民俗学では資料と情報の体系化の研究がなされてこなかった。来年度早々から、本格的着手が必須。学外専門家を交えたワーキング組織化と本格活動着手が必須。同時にデータ作成の規準化設定(データ台帳作成マニュアル)も必須。文字資料はどうかになるが、非文字資料は大変な問題を含んでいます。

外部評価報告2

常光 徹

1. 本プログラムの名称は、人間活動の文字化されない領域を対象として資料の体系化を図るという構想に照らして相応しいが、ただ「非文字資料」という言葉は、一般にはなじみが薄くその内容を具体的にイメージしづらい。広く知ってもらうためにも、非文字資料とは何かを分かりやすく説明する工夫をしたほうがよい。
2. プロジェクトの目的に沿って、各種の資料を精力的に調査し収集を進めている点は評価される。資料の蓄積にともなって、収蔵庫をはじめとして整理や分類作業のためのかなり広い空間の必要が予想されるが、現在の施設では十分とはいえない。併せて、COE支援事務室と担当教員の研究室との関係が機能的な配置となっているかどうか、検討の余地がある。
3. 研究の全体計画、および4班構成、事業推進者の編成は本プログラムを推進していく上で適切なものと考えられるが、実際の活動をより円滑に展開していくには、組織面において日本常民文化研究所等との関係のあり方を明確にして、さらに総合力を高める必要があるのではないかと。
4. 各班の目標の明確度には差があるが、いずれの班も目標の達成に向けて調査・研究活動を活発に展開している。ただ、5年間という限られた時間のなかで、何をどこまでできるのか早い段階でその可能性を検討し、場合によってはテーマを絞ることも必要ではないかと。
 現地調査等については、その計画や成果が常にプロジェクトの目標の達成とどう関わるのか(関わる可能性があるのか)という意識のもとに綿密な検討がなされ実施されている点は、当たり前のことではあるが重要であり評価される。
 研究活動を推進していく上で、構成員については必要性に応じて強化したほうがよいと思われる。4班ではコンテンツを担当する教員の補充。
5. 若手研究者育成のプログラムや条件は概ね妥当だと考えられるが、実際にどのような研究活動や作業を行っているのかが見えにくい。



外部評価

研究推進会議検討結果

研究推進会議は八重樫、常光両氏からの評価報告を受け、現状の問題点を整理・検討の結果、以下のような対応策を決定した。

問題点

1. 「非文字資料」という用語が一般に理解困難であり、その内容や範囲を十分に理解してもらうための方策を考えなければならぬ。(八重樫・常光)

対応策

非文字資料の意味する内容、取り扱う具体的な対象などを一般の人々にも理解できるように解説し、周知するための方策を以下のように2004年度で実施する。

- ① 7月にプログラム概要を発行し、そのなかで「非文字資料」について分かりやすく説明する。コラム的に用語解説をすることも検討している。概要を神奈川大学の各種広報活動、あるいは関連学会の会合などにおいて広く配布することで、本プログラムの内容を普及させるようにする。
- ② 本プログラムのホームページのコンテンツを見直し、分かりやすい表現と理解しやすい具体的事例を盛り込んだ構成にする。
- ③ ニュースレターにおいて、事業展開に伴って獲得した新知見をできるだけ分かりやすく解説し、速報性をもって広く知らせることで、「非文字資料」の内容を周知させ、一般の人々にも理解してもらえようとする。

問題点

2. 学内専門家のみではプログラムの目標達成は困難な面があるので、外部の専門研究者を積極的に組織し、研究体制を強化する必要がある。また、人文系研究者は組織的研究が必ずしも得意ではないので、学内外の研究者を組織し、共同研究として成果を挙げるようにするための工夫が必要である。(八重樫)

対応策

昨年度は事業推進担当者20名に加えて18名の学内外の研究者を共同研究員として組織し、研究を進めたが、2004年度にはさらにCOE教員3名(特任教授1名、非常勤講師2名)を採用して組織を強化するとともに、共同研究員も2名増員し、研究組織としては43名とした。指摘のように、人文系研究者は共同研究の経験も少なく、個人研究に走りがちであるので、達成目標に向けて共同するように種々の工夫を行なう。そのため、各班では共同作業、共同調査などをできるだけ実施し、また成果を班員全体で検討することを行なうように各班に対して要請する。また研究の進展と課題の変化に応じて、研究員の交替も考えている。

問題点

3. COEプログラムの成果としてデータベースの構築・公開は不可欠であるが、その作成のための体制は弱いので、要員の確保をはじめ種々の点で改善される必要がある。(八重樫)

対応策

現在、データベース作成は各班任せが現状であり、その作成従事者もPD、RAに依存しており、指摘のように弱体であるといわざるを得ない。2004年度以降、全体としてデータベース作成のための要員を確保し、また作成計画を策定し、統一的に実施するようにしたい。

問題点

4. 拠点間の連携をはかり、効率よく事業を展開するための方策が必要である。(常光)

対応策

現在、大学院歴史民俗資料学研究科、日本常民文化研究所および中国言語文化専攻とCOEの研究施設との間は物理的に離れており、その往来にも時間を要し、それが相互の連携・協力を弱めている。COEと各拠点の緊密な関係を形成するため、先ずその配置を近づけるべく、また事業展開に必要な面積を確保するべく現在大学当局と折衝中である。

日本常民文化研究所には専任職員があり、研究所の運営に大きな力となっているが、COEとも連携・協力して拠点としての研究所の発展を期するようにする。また各拠点の所蔵資料の活用を図る。

問題点

5. 限られた年数のなかで大きな成果を挙げるためには研究課題の見直しを考える必要がある。(常光)

対応策

現在、課題別に4班に分かれて研究を展開しているが、各班には各3本の具体的課題が設定されている。従って、合計12課題となる。確かに研究組織の規模、予算額などから判断して、指摘の通り、残りの年数で目標を達成することは困難になることが予想される。2004年度の終了時には全体を見直し、達成が困難と予想される課題は廃止・統合し、再編成する。

問題点

6. 若手研究者育成のプログラムが外から見えにくい。(常光)

対応策

現在COE研究員としてPD3名、RA5名を採用し、本プログラムの事業展開に大きな役割を果たしてもらおうとともに、各人の研究が進展するように研究に従事する勤務の割り振りを行っている。その日常的な様相は外部からは分かりにくい面があるので、ニューズレターその他の媒体でPD、RAの活動を積極的に取り上げて紹介する。そして、プログラムの全体事業に貢献した成果については、公刊する印刷物にその氏名を掲げて明確にし、また個人の研究成果を発表する機会をCOEとして設け、特に印刷公刊する場としての年報に収録するようにする。さらに2004年度から海外提携研究機関への短期派遣制度を開始し、海外への調査研究の機会を作る。



『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版』

富澤 達三 (COE研究員・PD)

今日、情報化社会のなかで映像メディアが日常生活の諸領域に深く浸透し、人々の価値観や文化・芸術のあり方を大きく変容させている。しかし、日本における視覚的メディアの浸透による社会変化は、現代になって初めて起きたわけではない。すでに19世紀の江戸では、視覚情報に媒介された社会意識の変化が広い範囲で起き始めており、今日のメディア文化状況を把握するにも、歴史的な視点からの認識は不可欠である。

天保改革では厳しい奢侈禁止令が出され、錦絵（浮世絵版画）もぜいたく品と見なされ、画題・使用色数・販売方法などに細かな統制が加えられた。こうしたなか、江戸の絵師・歌川国芳が三枚続の錦絵『源頼光公館土蜘蛛妖怪図』で水野忠邦の改革を風刺すると、改革に苦しむ庶民はこぞって買い求めた。国芳はその後も、大奥を風刺したとされる『きたいな名医難病療治』、ペリー来航を題材とした『浮世又平名画奇特』などを描き、巷で評判となった。江戸幕府は、政治風刺はもちろん巷の話題ですら、錦絵などの出版物に盛り込み不特定多数の人々に販売することを硬く禁じていた。しかし国芳は巧妙に言い逃れ、検閲を通った錦絵で政治風刺や当節めいた話題を描くことに成功したのである。一方、幕末期の大都市では無検閲の出版物「かわら版」が日常的に販売されていた。特に弘化から嘉永期は災害の頻発・異国船来航などの大事件があい次ぎ、それらを伝えたかわら版が江戸・大坂で数多く出される。かわら版の大量出版は合法出版物である錦絵にも影響を与え、「錦絵のかわら版化」とも呼びうる現象を生む。やがて天保改革は失敗し、江戸錦絵界が再び息を吹きかえすなか、弘化・嘉永期以降には美人絵・名所絵・役者絵など、それまであった江戸錦絵のジャンル以外に、時事的な話題を伝えた「時事錦絵」とも呼びうる作品が登場し、庶民の情報源として重要な役割を果たしたのであった。「時事錦絵」は文字と絵によって情報を整理し、一種のジャーナリズムの役割を担っていったと考えられる。

本書では「時事錦絵」の例として、嘉永2年（1849）の江戸流行神（内藤新宿奪衣婆・日本橋翁稻荷・お竹大日如来）に関する錦絵・安政2年（1855）の安政江戸地震後に江戸で爆発的なブームを巻き起こした「鯰絵」・文久2年（1862）の江戸での麻疹流行をテーマとする「はしか絵」などを悉皆調査し、それらが江戸庶民社会にお

いて果たした役割を考察した。そして、それらの「時事錦絵」が、事件の経過を継続的に伝えるだけでなく、地震除け・麻疹除けといった呪術的側面をも持っていた事実を示し、人々の心性に大きな影響を及ぼしていた可能性をも指摘した。なお、本書においては一次史料として、かわら版・錦絵の資料を数百点使用したが、それらの史料の所蔵先を示すとともに、モノクロの小型版ながらも画像資料を可能な限り収録するよう努めた。とくに「はしか絵」では、漢字の読みがな部分を含めた解説文章を収録した。これらは著者なりの、画像資料公開へのささやかな挑戦であるが、画像資料を使った歴史民俗資料学研究の一助となれば幸いである。

江戸時代を代表する庶民文化である錦絵は、明治期になっても変わらぬ人気を維持し、大量の作品が作られた。そして文明開化の風俗や巷の事件・政治的話題を描いた「時事錦絵」も出されていく。幕末江戸庶民の重要な情報源であった「時事錦絵」が明治期にはどのように展開し衰えたのか、それらが明治期の庶民社会でいかなる役目を果たし、人々の心性に影響を及ぼしていたのかについては、今後の課題としたい。

（文生書院、2004年2月刊。定価4,900円）



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2004年4月～7月）

タイトル	発行所
『青丘学術論集』第1～24集	韓国文化研究振興財団
福田 和彦編著『大江戸 浮世絵の春』	KKベストセラーズ（井川政己氏 寄贈）
福田 和彦編著『世界の浮世絵』	KKベストセラーズ（井川政己氏 寄贈）
福田 和彦編著『秘宝浮世絵』	KKベストセラーズ（井川政己氏 寄贈）
黒田 日出男研究代表『荘園絵図史料のデジタル化と画像解析的研究』	東京大学史料編纂所
東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター編『風説留中画像史料一覧（稿）』	東京大学史料編纂所
東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター編『摺物総合編年目録（第二稿）』	東京大学史料編纂所
東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター編 『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』	東京大学史料編纂所画像史料解析センター
赤坂 憲雄責任編集『東北学』vol.1～9	東北芸術工科大学 東北文化研究センター
赤坂 憲雄ほか責任編集『別冊 東北学』vol.1～7	東北芸術工科大学 東北文化研究センター
小松 義夫著『地球生活記 世界ぐるりと家めぐり』	福音館書店（井川政己氏 寄贈）
町田市立博物館編『多摩の民具 江戸時代の農具』	町田市立博物館
町田市立博物館編『農耕図と農耕具展』	町田市立博物館
町田市立博物館編『牛玉宝印』	町田市立博物館
町田市立博物館編『幕末の風刺画』	町田市立博物館
町田市立博物館編『東海道五十三次漫画絵巻』	町田市立博物館
町田市立博物館編『多摩の民俗 養蚕信仰』	町田市立博物館
町田市立博物館編『錦絵に見る病と折り』	町田市立博物館
町田市立博物館編『ミロクと福德』	町田市立博物館
町田市立博物館編『町田・民俗の世界から』	町田市立博物館
町田市立博物館編『たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』	町田市立博物館
町田市立博物館編『養蚕機織図』	町田市立博物館
金 龍煥著『韓国』風俗画』	民文庫（井川政己氏 寄贈）
横浜市歴史博物館編『収蔵資料展 江戸風俗絵巻』	横浜市歴史博物館
『서울대학교 개교55주년 기념 특별전시회-예술과 정보의 만남』	서울대학교 규장각（ソウル大学奎章閣 寄贈）
『장거전 특별전 -다시 열린 開川』	서울역사 박물관（ソウル歴史博物館 寄贈）
『激動する世界と中国 現代中国学の構築に向けて』a（2003年度国際シンポジウム報告書）	愛知大学国際中国学研究センター
『F-GENSジャーナル』No.1	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」
『社会調査の最前線 いま何が求められているのか』a（シンポジウム成果報告書）	関西学院大学大学院社会学研究科COE研究推進室
『国際比較調査の効用』a（国際シンポジウム成果報告書）	「人類の幸福に資する社会調査」の研究
『調』Vol.0	
『東アジアと日本 交流と変容』a 創刊号	九州大学大学院比較社会文化研究院「東アジアと日本：交流と変容」
『漢字と文化』No.3	京都大学人文科学研究所 文部科学省21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」
『NEWS LETTER』No.4	京都大学大学院法学研究科21世紀COE事務局 「21世紀型法秩序形成プログラム」
『ニュースレター』No.1	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
『Journal of Political Science and Sociology』No.1（欧文紀要）	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
『Newsletter』No.5、6 第1回国際シンポジウム報告書 2003年度院生研究報告書	慶應義塾大学21世紀COE研究拠点「心の統合研究センター」
2003（平成15）年度 研究拠点形成成果報告書	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「次世代メディア・知的社会基盤」
『日本における神観念の形成とその比較文化論的研究』研究報告 『神を迎える』	國學院大学21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
『死生学研究』2004年春号	東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」
『史資料ハブ 地域文化研究』No.3	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
『Wind Effects News』No.3	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
『100年先から見てみよう』	東京農工大学21世紀COEプログラム
『100年先から見てみよう 地域・バイオマス・新エネルギー』講演集、 『バイオマス社会』実現を目指す 新たな協働』（第1回ワークショップ記録集）	「新エネルギー・物質代謝と「生存科学」の構築」
『東アジア出版文化研究 になわずみ』	東北大学東アジア研究センター 文部科学省特定領域 「東アジア出版文化の研究」班
『テキストとその生成』a（第3回国際研究会報告書）	名古屋大学21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」
『ニュースレター』No.1	日本福祉大学COE推進本部
『NewsLetter』No.2	一橋大学21世紀COEプログラム事務局 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
『21世紀型高等教育システム構築と質的保証』中間報告 2004年3月	広島大学高等教育研究開発センター-21世紀COEプログラム研究教育拠点
『日本の中の異文化』a（研究報告第3集2003）	法政大学国際日本学センター「日本発信の国際日本学の構築」
『知識科学に基づく科学技術の創造と実践』	北陸先端科学技術大学院大学科学技術開発戦略センター
『演劇研究センター紀要』	早稲田大学21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」



主な研究活動

研究推進会議

本プログラムの研究組織を統括、調整、指導するために設置され、拠点リーダー、サブリーダー、研究遂行責任者、事務局長で構成される。本事業に係る研究教育計画の企画・立案、その他本事業の実施に関して必要なすべての事項を審議・策定する。今年度に行われた会議日時とその主な議題は、以下のとおりである。

- 第1回 4月16日(昨年度研究拠点形成費実績報告、RA選考、今年度研究実施計画、他)
- 第2回 5月26日(外部評価書の対応、PD・RAの研究業務、COE共同研究員の追加委嘱、他)
- 第3回 6月30日(若手研究者の派遣・招聘、海外提携対象機関の追加、他)
- 第4回 7月30日(第2四半期の予算執行、2003年度外部評価対応の具体化の方策、他)

全体会議

第7回 7月9日(於：横浜キャンパス1号館 804会議室)

研究推進会議の決定をうけて、研究担当者に周知するために定期的に開催するもの。今回も、予算執行状況、人事情報をはじめ、外部評価についての対応策や、若手研究者の派遣・招聘、概要の作成など、盛りだくさんの議題に関して報告・議論がなされた。



研究会

(6月1日～8月31日実施分)

全体

7月9日

増野 恵子 / 明治前期のメディアと天皇肖像

班

6月8日・3班

浜田 弘明 / 景観を記録し保存すること

増野 恵子 / 明治中期のマスメディアに現われた天皇肖像について

6月25日・1班

金 貞我 / 徐揚筆『姑蘇繁華図』について

佐々木 睦 / 清末絵入り新聞についての覚え書き

7月9日・1班

田島 佳也 / 東アジア版生活絵引きの編さんについて

7月9日・2班

2004年度 調査概況

7月23日・1班

中村 ひろ子 / 『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんについて



現地調査

(6月1日～8月中旬実施分)

河野 通明	秋田県秋田市・昭和町・若美町他(6月2日～6日)
秋田県立博物館・昭和町歴史民俗資料館他の鍬、馬鍬、馬耕犁、農耕鞍、荷鞍など由来農具の比較調査	
北原 糸子、増野 恵子	岐阜県岐阜市・大阪府大阪市(6月11日～13日)
岐阜県美術館・大阪歴史博物館・中之島図書館において山本芳翠についての調査研究と水害関連資料閲覧等	
田口 洋美	長野県下水内郡(6月14日～21日)
栄村秋山郷小赤沢における集落生業及び景観に関する現地調査	
河野 通明	秋田県大曲市・田沢湖町・千畑町他(6月16日～20日)
秋田県立農業科学博物館・千畑町郷土資料館他の鍬、馬鍬、馬耕犁、農耕鞍、初摺臼など由来農具の比較調査	
廣田 律子	秋田県仙北郡(6月16日～18日)
わらび座デジタルアートファクトリーにて中国石郵村の戯舞の演技をモーションキャプチャーで記録する作業の実施	
佐野 賢治、大里 浩秋、田上 繁、中村 政則、能登 正人、的場 昭弘、網野 暁	福島県南会津郡(6月17日～19日)
只見町の民具、民俗、文書資料の資料化、データ化保存法の現地調査	
孫 安石、田島 佳也	韓国 ソウル・釜山(6月24日～27日)
韓国国立中央博物館・国史編纂委員会他で、朝鮮通信使随行画員が描いた日本人の風俗画の調査と収集	
北原 糸子、増野 恵子	岐阜県岐阜市・大垣市他(6月25日～27日)
根尾谷地震断層館・岐阜県立図書館・大垣市立図書館での資料調査	
金子 隆一、北原 糸子、増野 恵子、富澤 達三	東京都新宿区(7月6日)
国立科学博物館新宿分館にて明治期の災害写真の閲覧、調査	
福田 アジオ、君 康道、金 貞我、菊池 勇夫、佐々木 睦、田島 佳也、中村 ひろ子、網野 暁、富澤 達三、中町 泰子	神奈川県横浜市(7月23日)
横浜市歴史博物館で「江戸風俗絵巻展」の見学、および近世風俗に関する絵引作成のための調査	
佐々木 睦	中国 福建省(7月24日～29日)
廈門・泉州での図像調査と、資料収集	
彭 国躍	中国 上海・江蘇省・浙江省(7月29日～8月17日)
復旦大学、華東師範大学、蘇州大学他での色彩意味論に関する資料調査	
増野 恵子	岐阜県岐阜市(8月3日～6日)
岐阜県立図書館にて災害メディアの調査研究	
川田 順造、落合 一泰	メキシコ メキシコシティ他(8月4日～17日)
メキシコシティ、モレリア、バツクアロ湖周辺村落において農耕村落・工芸品生産村落における先住民の身体技法の調査	
河野 通明	山形県米沢市他、秋田県平鹿町他、宮城県七ヶ宿町他(8月6日～14日)
置賜民俗資料館・矢島町郷土資料館他の鍬、馬鍬、馬耕犁、初摺臼など由来農具の比較調査	
富井 正憲、中島 三千男、大坪 潤子	グアム、北マリアナ諸島連邦、パラオ共和国(8月7日～16日)
サイパン、テニアン、ロタ、コロールなどの旧南洋諸島に建てられた旧官幣社南洋神社他の神社跡地の調査	



2004年度 研究担当者紹介（事業推進担当者・COE教員・共同研究員）

・各班リーダー（印）以下、五十音順 ・共同研究員（印） ・2004年9月現在

1班 画像資料の体系化と情報発信

氏名	所属部局・役職	専門分野
福田 アジオ	歴史民俗資料学研究所 教授	民俗学
菊池 勇夫	宮城学院女子大学学芸学部 教授	日本近世史・北方史
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科 専任講師	日本民俗学
金 貞我	延世大学博物館 客員研究員	日本絵画史・東洋美術史
小馬 徹	歴史民俗資料学研究所 教授	文化人類学・社会人類学
佐々木 睦	東京都立大学人文学部 助教授	中国文学（古典文学・幻想文学・表象論）
ジョン・ボチャラリ	東京大学大学院総合文化研究科 教授 歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	比較文学比較文化・日本研究
鈴木 陽一	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	明清白話小説史・江南地域文化
田島 佳也	日本常民文化研究所 教授	日本経済史（近世）
中村 ひろ子	COE特任教授	博物館学・民俗学
西 和夫	日本常民文化研究所 教授	日本建築史

2班 身体技法および感性の資料化と体系化

氏名	所属部局・役職	専門分野
川田 順造	歴史民俗資料学研究所 教授	人類学
芦澤 玖美	大妻女子大学人間生活科学研究所 教授	生物人類学・成長学
落合 一泰	一橋大学大学院社会学研究科 教授	文化人類学・ラテンアメリカ研究
夏 宇継	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	中国民俗学
楠本 彩乃	株式会社シンエイ商品開発部研究室 室長	自然人類学
河野 通明	日本常民文化研究所 教授	農業技術史
廣田 律子	歴史民俗資料学研究所 教授	中国民俗学・祭祀演劇
彭 国躍	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	言語学
山口 建治	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	中国民間文芸

3班 環境と景観の資料化と体系化

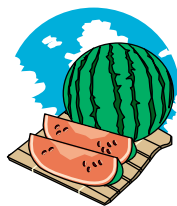
氏名	所属部局・役職	専門分野
香月 洋一郎	日本常民文化研究所 教授	民俗学
北原 系子	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	日本近世・近代社会史
田口 洋美	東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻 博士課程	環境学・民俗学
富井 正憲	工学部 専任講師	建築計画・設計
中島 三千男	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近現代思想史
八久保 厚志	外国語学部 助教授	人文地理学
浜田 弘明	桜美林大学資格・教職教育センター 助教授 COE教員（非常勤講師）	文化地理学・博物館学
増野 恵子	早稲田大学教育学部 非常勤講師	美術史
三鬼 清一郎	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近世史

4班 文化情報発信の新しい技術の開発

氏名	所属部局・役職	専門分野
佐野 賢治	歴史民俗資料学研究所 教授	民俗学
青木 俊也	松戸市立博物館 学芸員・COE教員（非常勤講師）	日本民俗学
宇佐見 義之	工学部 助教授	物理学
大里 浩秋	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	中国近代史・日中関係史
金子 隆一	東京都写真美術館 学芸専門調査員	写真史
橘川 俊忠	歴史民俗資料学研究所 教授	日本政治思想史
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授	情報セキュリティ著作権制御・画像工学
齊藤 隆弘	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授	画像処理・情報数理
孫 安石	外国語学研究所中国言語文化専攻 助教授	中国近代史・都市史
田上 繁	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近世経済史
中村 政則	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近現代史
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻 助教授	計算機科学・システム情報工学・人工知能
の場 昭弘	経済学研究科 教授	社会思想史・社会史
丸山 宏	筑波大学人文社会科学研究所 助教授	中国宗教史

子どもサマースクール

神奈川県役所と本学主催のプログラム「子どもサマースクール」(小学生対象)を7/26~30の期間、本学横浜キャンパスにて開催しました。毎年好評のこのスクールでは、コンピュータ操作の他に、「大学ではどんなことをしているの?」をテーマにして、子供たちが感じたこと、分かったことを、ホームページにまとめて発表します。7/27には各グループで調査場所を訪問、私達COEの業務の一端を見学、体験しながら、各自取材を進めました。こうして出来上がった子供たちの作品は、本学ホームページ(神大ニュース)からご覧頂けます。(http://www.kanagawa-u.ac.jp)



COE 研究員に業務内容について質問をする。



画像資料をパソコンに取り込む作業に挑戦。



作成したホームページより

調査研究協力者

神奈川大学21世紀COEプログラムの調査研究活動に際して、支援を頂く研究者等をCOE調査研究協力者に委嘱しております。本年度に依頼しているのは、右記の方々です。

2004年9月現在

班	氏名	所属部局・職名
3	李 善愛	宮崎公立大学人文学部国際文化学科・講師
2	長瀬 一男	わらび座デジタルアートファクトリー・チーフディレクター
2	海賀 孝明	わらび座デジタルアートファクトリー・チーフエンジニア
2	金 鋒	中国科学院遺伝学研究所人類遺伝・教授

貴重資料の紹介

- G Waldo Browne *JAPAN. The Place and the People* (Boston: Dana Estes & Company, 1904)
- Mortimer Menpes *JAPAN: A Record in Colour* (London: Adam and Charles Black, 1910)
- Julian Steet *Mysterious Japan* (New York: Doubleday, Page & Company, 1921)
- H.G.Ponting *Japanese Studies* (小川一真 出版部, 1906年)
- N.Mcleod *Third Edition Illustration to the Epitome of the Ancient History of Japan* (Tokyo, 1879)
- 『朝鮮神宮写真帖』(朝鮮神宮社務所, 1930年)
- 『東海道名所図会』1~6
秋里湘夕(籬島・舜福)編、竹原春朝斎等画(1797年)
- 中国絵葉書(第2次世界大戦前)約900点



「赤子と子守り」



「大提灯」

共にメンペス『日本カラー図会』より

編集後記

日本常民文化研究所の設立者、渋沢敬三は共同研究で最も肝腎なのは、ハーモニアス・デベロップメントだといった。本プロジェクトも二年目に入り、各研究者・班の連携・連絡が密に求められるようになってきた。本誌が少しでもその手助けになれるように、編集上の工夫も試みたい。

(佐野)

今号の編集作業は、夏休み期間とぶつかり、先生方は研究活動の真っ最中。まさに東奔西走で国内外を飛び回っている中、本誌の原稿を執筆して頂きました。

昨年初めて本誌を担当して以来、毎回編集の難しさに悩んでいますが、特に今号では「対談」での興味深い話をいかにまとめるかが、前回同様、非常に難しい作業となりました。誌面の都合で割愛せざるを得なかったお話がたくさんあるのが残念です。

(関)

貴重資料の紹介

2003年度に購入した資料

日本常民文化研究所

第8回 常民文化研究講座

わざ・こころ・からだ 芸能の継承と現状

舞や謡や演技に型のある芸能として能と京劇を、一方、型のない芸能として奥三河の花祭りと中国江西省石郵村の儺舞を取り上げ、それぞれの技術の習得に見出せる芸の伝承の本質を探ります。客観的なデータから演技の伝承の特性を明らかにするCOE「非文字資料研究」の取り組みの成果も含めて公開します。

日時：2004年11月13日(土) 10:20～17:00

会場：横浜キャンパス2号館地下演習室 定員：250名 参加費：無料

講師：関根祥人(観世流能楽師)、靳飛(日中伝統戯劇交流促進会会長・作家)・

通訳 波多野真矢(立教大学講師) 伊藤勝文(花祭会館館長) 長瀬一男(わらび座デジタルファクトリー チーフディレクター) 廣田律子(本研究所員) 後藤淑(昭和女子大学名誉教授)

申込み：官製ハガキに住所・氏名・TEL・年齢・「常民講座希望」とご記入の上、神奈川県日本常民文化研究所(〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1)宛にお送り下さい。FAXでも受け付けます。(FAX.045-413-4151) 締切：11月1日(月)



第3回 企画展 鍛造の世界 鉄をきたえ意志をふきこむ

鉄の塊を熱し、打ち鍛えて形を造り出す。熱処理加工を経て、研いで人の意思を形にする。そこには時代と社会が明確に反映しています。

日時：2004年10月26日(火)～12月21日(火)

月～金 12:30～16:30 木曜日のみ15:30～19:30

休室日：土・日・祝日(ただし、11/6(土)、14(日)12:30～16:30、11/13(土)12:30～18:00は開室)

会場：横浜キャンパス3号館1階 常民参考室 入場：無料



ワークショップ たたら製鉄 砂鉄から鉄塊をつくる

日時：2004年11月6日(土)

会場：横浜キャンパス グラウンド(小雨決行) 定員：15名

講師：永田和宏(東京工業大学・冶金学)

申込み：参加には所定の用紙による申込みが必要です。10月4日(月)までにお問い合わせ下さい。

古文書修復実習

日時：2004年11月14日(日)、15日(月)

会場：横浜キャンパス3号館102・104室 定員：15名

講師：田上繁(本研究所員)、関口博臣(鶴見大学)、白水智(中央学院大学)

申込み：参加には所定の用紙による申込みが必要です。10月4日(月)までにお問い合わせ下さい。

お申込み・お問い合わせ

神奈川県日本常民文化研究所
045-481-5661(内線4358)

歴史民俗資料学研究科

外国語学研究科 中国言語文化専攻

『歴史民俗資料学研究』第9号

2004年3月発行

編集・発行：神奈川県立大学大学院
歴史民俗資料学研究科

昨年12月に行われた本研究科10周年記念シンポジウム時の講演会、パネルディスカッション他、本研究科関係者の論文等をまとめた2003年度の紀要です。



講演会「近代中日関係史研究」

日時：9月24日(金) 16:30～18:00

会場：横浜キャンパス17号館 216室

講師：易恵莉(上海華東師範大学・教授)

共催：人文学研究所日中関係史グループ、科学研究費「東アジアにおける‘学’の連鎖 中華民国期の日中間の留学生派遣に関する研究」グループ

非文字資料研究 No.5

発行日 第5号 2004年9月30日発行

編集・発行 神奈川県立大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp>

